『人文学報』第117号（2021年５月）
（京都大学人文科学研究所）

松尾尊兊と大正デモクラシー研究

福　家　崇　洋*

は　じ　め　に

本論は，「大正デモクラシー」として知られる分析概念を，松尾尊兊の軌跡と学問を通して再検討する[1)]。

大正デモクラシーという呼称は，1950年代に信夫清三郎が自著で用いてから定着した。服部之総の弟子で，旧講座派の流れを汲む信夫にとって[2)]，大正デモクラシーは「民主主義の正当な嫡子」ではなく「日本帝国主義の鬼子」であり[3)]，その担い手は「帝国主義ブルジョワジー」であった[4)]。

その後，大正デモクラシーは，戦後の日本社会の変遷や講座派歴史学の相対化と相まって，学問的な意義を実証的に検討する作業が積み重ねられてきた。大正デモクラシーが世に認められる転機となったのが1970年代半ばである。それ以前から大正デモクラシー研究は世に出ていたが，70年代半ばに重厚な大正デモクラシー研究が相次いで刊行された。鹿野政直『大正デモクラシーの底流』（日本放送出版協会，1973年），金原左門『大正期の政党と国民』（塙書房，1973年），松尾尊兊『大正デモクラシー』（岩波書店，1974年），三谷太一郎『大正デモクラシー論』（中央公論社，1974年），太田雅夫『大正デモクラシー研究　知識人の思想と運動』（新泉社，1975年）などである。

この状況について飛鳥井雅道は次のようにまとめている。

> 論者たちの視座は一貫して共通だ。戦後民主主義擁護であり，もし現在の民主主義が「閉塞状況」であるとするならば（鹿野氏），その突破はあくまで戦後民主主義とその原型大正デモクラシーに固執して，その可能性をさらにおしひろげるところからしか生まれえ

* ふけ　たかひろ　京都大学人文科学研究所

ないとする信念なのであった。[5)]

今から見れば，飛鳥井が言うほど，大正デモクラシーと戦後民主主義に対する各論者のスタンスは一様ではない。しかし，敗戦から 30 年経ち，明治百年記念（1968 年）から元号法制化（1979 年）にいたるなかで，戦後民主主義の「空洞化」を克服する道を歴史に求めようとしていたことは確かである。

その中で，大正デモクラシー研究をライフワークとして推し進めた研究者のひとりが松尾尊兊であった。今日，松尾の大正デモクラシー研究でもっとも入手しやすく，かつその要諦を知ることができる著書が『大正デモクラシー』（岩波現代文庫，2001 年）である。これは 1974 年の前掲書が再刊されたものである。師の北山茂夫に捧げられた同著は，これまでの研究成果が集約された，松尾の主著のひとつである。

本書の冒頭で，松尾は大正デモクラシーの定義を述べたうえで，2 つの課題を設定した。第一に，「大正デモクラシーが，時期により，そのにない手を交代させながら，次第に国民の間に根をおろしていく過程を実証すること」。第二に「内には立憲主義，外には帝国主義」における後者の足鎖を，「社会主義と自由主義の二要素のからみあう運動の展開のなかで，どのように，またどのていどまで克服されていくのか，その実態を考察すること」である[6)]。大正デモクラシーの深度と射程を実際の歴史に照らし合わせて見極めることが本書の目的であった。

今日から見て意外なのは，松尾の研究が，同時代の歴史学界にすぐに受け入れられたわけではなかったことである。旧講座派の影響が残る歴史学界では，一定の違和感をもって受け止められた。松尾によれば，1960 年代に入っても大正デモクラシーを評価する研究者は学会でも少数で，さる酒席で遠山茂樹から「松尾は社民〔社会民主主義〕だ」と言われたことを後年明らかにする。当時，社民呼ばわりは「知識人の恥」だったが「社民で何が悪いか，と反発したい気持」だったと松尾は語る[7)]。歴史学界からの違和感を予期していたと思われるが，自らの問題意識と方法が正確に汲みとられないことに対して忸怩たるものがあったに違いない。こうした傾向は関西でも同様で，1970 年代まで研究者の間では大正デモクラシー論に消極的，批判的であることが一般的だった[8)]。

「革新」派論者からも批判が寄せられた。伊藤隆，有馬学は，1975 年に松尾，鹿野，金原，三谷の前掲書の書評を『史学雑誌』に載せた。とくに松尾の『大正デモクラシー』が批判対象に据えられた。デモクラシーと反デモクラシーの対立図式に疑問を呈して，「彼らがこの時期「デモクラット」であったことと，昭和期に「国家主義」的であった事は統一的にとらえられるべき」ことが提起された。そのために，伊藤は自著の『昭和初期政治史研究』（1969 年）で打ち出した「革新」派概念の有効性に言及した[9)]。

「革新」派論からの批判には，その後の展開も含めて，松尾が直接相対することはなかった。

しかし実際，伊藤らが書評で援用した宮地正人『日露戦後政治史の研究』（1973 年）に対して，1974 年の時点で松尾は言及している。

> ちかごろ，この反藩閥急進派を「立憲（主義）的帝国主義」とか，「国民主義的対外硬派」とよぶ研究者がある。とくに後者の場合，宮地正人氏の『日露戦後政治史の研究』の詳細な調査にもとづく分析をふまえての提言であるだけに説得力に富むが，わたくしにはこういう呼称では，問題によっては社会主義者とも共同行動に出ようかというリベラルな側面が表現されないので，いくらか抵抗感をおぼえる。[10]

宮地はというと，松尾の『大正デモクラシーの研究』（1966 年）の大正デモクラシーの定義を同著で引用したうえで，「全体として戦争と民衆，あるいは帝国主義国における民衆運動の諸特殊性，民族意識等々の諸問題を自己の論旨にくみこむことに成功しているとはいいがたい」[11] と批判していた。

松尾の前掲書における大正デモクラシーの定義は，「日露戦争後より大正末年にかけて，日本の政治・社会ないし文化の各方面に顕著に現われた民主主義的傾向」[12] であった。この内容ならば宮地の批判に一定の妥当性はある。だが，松尾は早くから「外には帝国主義」の部分を研究しており，73 年時点で宮地の批判は織り込み済みであった。

ゆえに，松尾の「抵抗感」は，分析枠組みに向けられた。「問題によっては社会主義者とも共同行動に出ようかというリベラルな側面が表現されない」というものである[13]。言葉を補うなら，自由主義者には国家主義や帝国主義に向かう部分と「リベラル」な部分があり，後者を歴史から析出したいという趣旨だと考えられる。こうした思想と運動の硬直性を乗り越えようとする姿勢にこそ，松尾の大正デモクラシー研究の要諦が出ている。

松尾が 2014 年に亡くなって以降，『二十世紀研究』16 号（2015 年）で特集「松尾尊兊先生の学問的業績を偲んで」が，『日本史研究』648 号（2016 年）で特集「いま，デモクラシーを考える　松尾尊兊氏の研究の批判的継承のために」が組まれた[14]。いずれも，松尾の学問的業績を振り返るにとどまらず，戦後の歴史学や現代の民主主義との関わりが論じられている[15]。本論もこの流れを受け継ぎ，松尾の軌跡と学問をたどりながら，大正デモクラシーの批判的継承について改めて考察したい[16]。

1　愛国青年から共産党シンパへ

松尾は，父長造と母春野の長男として，1929 年 11 月に鳥取県鳥取市東町 168 番地で生まれた。生家は鳥取城のすぐ側である[17]。

父長造は，中小地主の長男として地元にとどまり，中学卒業後は仏教青年運動や政治運動に関わった。彼は地元の有力実業家・政治家だった米原章三の傘下にいた。1925 年には大正鳥取銀行若桜橋支店長に就き，以後，松江銀行鳥取支店長，山陰合同銀行検査部長，鳥取地方木材の総務部長，敗戦後は東亜木工役員から鳥取県の出納長をつとめた[18]。

松尾は，1936 年 4 月に鳥取市立久松尋常高等小学校に入って 42 年 3 月卒業，翌月自宅側の鳥取県立鳥取第一中学校に入学した。卒業は 46 年 3 月である。一年短い 4 年の在学中，時局の影響から授業を受けたのは 2 年間で，残りの 2 年間は勤労動員だった[19]。

松尾は晩年になってから自らの中学時代の日記を翻刻して，「戦中工場学徒勤労動員日記」上・下を『鳥取地域史研究』9，10 号に掲載した。そこに認められるのは愛国青年の姿である。例えば，「噫，終に巨星墜ちぬ。ヒットラー・ムッソリーニ，両雄遂に逝きぬ。然れども彼等のその全身全霊を祖国の為に捧げし偉勲は，永久不滅なり。両雄よ。吾等必ず仇を取らん！」（1945 年）などとある[20]。こうした思想を持つ松尾青年にとって敗戦は衝撃で悔し涙を流した[21]。

46 年 9 月に松尾は隣県の松江高等学校文科甲類に入学した[22]。しかし，1 年早い入学だったこともあり，英語の授業についていけず，翌月鳥取に戻った。

追い打ちをかけるように，鬱病と蓄膿症を発病した。心配した母親の注進を受けた，中学時代の恩師林菊三郎によって中村甫師のもとに連れていかれたこともあった[23]。鬱病にともなう精神修養のためだろう。この時のことを松尾は，「日が短くなるにつれ鬱が昂じ，長くなるとともに警戒に向かうことの繰り返しであった。…頭の重いことや，肩のこるのは蓄膿症のせいだと思いこみ，高校時代に二度も大手術を受けた。…／大学に入っても気になって学生の保健診療所に通った。」[24] と語る。

病との付き合いが続くなか，1 年後に高校に復帰，新たな生活をスタートさせた。松尾の回想によれば，当時の松江高校は日本共産党のメンバーが多く，文科甲類約 40 人のうち半数は共産党に入っていたという。松尾自身は入党しなかったが，同級生が取り組んだ授業値上げ反対ストライキや，松江民科（民主主義科学者協会は 1946 年 1 月設立）に参加し，この頃から共産党の「シンパ」へと変わった[25]。2 年時のストライキ，デモ体験は「不思議なほど私の思考を一変させた。マルクス主義的なものがにわかに理解されはじめた。まさに存在は意識を規定したわけである」と後年振り返る[26]。

もうひとつ，松尾の学校生活を好転させたのが同校教員の藤原治との出会いであった。藤原は東京帝大文学部卒で，羽仁五郎の弟子であった。3 年間，松尾は藤原の自邸に足繁く通った[27]。藤原との出会いが，松尾に歴史学との関わりをもたらした。松江高校在学中に羽仁五郎の『日本における近代思想の前提』（岩波書店，1949 年）を読んだというが[28]，藤原のすすめかもしれない。

さらに，1950 年 4 月の京都大学文学部入学に際して[29]，藤原から旧友で同じ羽仁門下の北山茂夫（同月立命館大教授に昇任）を紹介された。松尾は 4 月に京都に移り，吉田山東麓の北山邸を訪問した。早速，北山に案内されたのが寺町二条の三月書房であった。ここは当時，6 月の第 2 回参議院議員選挙に立候補する羽仁五郎の選挙事務所になっていた[30]。

この時，事務所を取り仕切っていたのは，やはり羽仁門下の井上清であった。また事務所に手伝いに来ていた，当時京大院生の岩井忠熊とも出会った[31]。松尾は，授業開始後の投票日まで連日トラックに乗り，マイクで「黒い紙には大山郁夫，赤い紙には羽仁五郎」などと宣伝していた[32]。今では考えられない大学生活の始まりである。

羽仁本人には良い印象を持たなかった松尾だが，京都に来て羽仁門下の一翼に参加し，北山とは終生師弟関係を結び，井上とは京大で同僚になる。もともと中世史志望だった松尾に近代史を勧めたのも北山だった。井上とは先の選挙運動で歴史談義に花が咲き，早くも米騒動という卒論テーマを与えられた[33]。

松尾の大学生活に話しを移そう。松尾によれば，当時はマルクス主義に関心をもつ学生が多く，8，9 割の文科系京大生の支持政党は共産党だったという[34]。当時，共産党は，50 年分裂とレッドパージを経て，革命実現に向けて，活動を地下に移行させつつあった。松尾は党員ではなかったものの，広く見れば，党の運動の一端を担っていた。「赤旗の京都限りの機関紙みたいなのがあって，ガリ版刷りの，僕は共産党員でもなんでもないくせに，自分の下宿でそのガリ版刷りを刷ってた人なんだ。そのくらい僕も結構シンパだったっていうのかな。」と後年語る[35]。関西や京大で強かった，主流派（所感派）に近かったと思われる。「過去三年の学生生活を通じ，あらゆるデモに参加したことをもつて自ら誇りとしている私」と述べるように，運動が生活の主軸となっていた[36]。

この時期の京大学生運動でよく知られるのが京大天皇事件である。1951 年に，天皇が京大の時計台に進講を受けに来たときに，天皇を見に来た学生たちと警備の警官との小競り合いが起きた[37]。この場に一学生として居合わせた松尾は『世界』76 号（1952 年 4 月）に「京都市一学生」名義で投稿した。その内容は，天皇事件をめぐって学生を批判する国民，マスメディアへの再批判を意図したものである。そこで，松尾は「われわれ学生はもう再び“わだつみの声”のような敗者の叫びはくりかえしません。われわれは自分の生命は自分で守るより他にないことを知つています。そのためには組織をつくつて行動によつて実力によつて戦争屋どもと戦うより他に道はないということを知つています。」と語る[38]。反戦への並々ならぬ意志を感じる叙述である。

2　京大人文研助手への採用

旧制で入学したため在学3年で，1回生は吉田分校に通い教養課程を学び，2回生から専門課程に移行した。当時の国史の教員は小葉田淳，赤松俊秀である[39]。

松尾は，公職追放となった西田直二郎の影響が残る京大国史には違和感を感じていた。回想で，民間の歴史団体との関わりの方を強調しており，これらの団体を「京大の学問のあり方に反旗を翻す「反乱軍」」と述べる[40]。

松尾が関わった主な歴史団体は，京都民科，日本史研究会，歴史学研究会である。もっとも早い関わりが記録から追えるのは東京の歴史学研究会である。2回生時の1951年5月に歴史学研究会の大会に出席した。この時の大会テーマは「歴史における民族の問題」（報告者は藤間生大，古島和雄，鈴木正四，遠山茂樹，野沢豊）で，「民族」概念をめぐって意見対立があった。松尾はこのとき，山辺健太郎のもとに細川嘉六旧蔵米騒動資料を見に行った[41]。井上清から与えられた卒論テーマで準備していたことがわかる。

松尾は1952年5月に開催された歴史学研究会創立20周年大会に参加し，そこで日本史研究会・民科京都支部歴史部会の学生有志で作成した紙芝居「祇園祭」を上演したことが先行研究から明らかになっている[42]。前年の歴研大会のテーマに沿ったもので，「民族の独立」，民族統一の英雄を歴史から発見しようとする，国民的歴史学運動の一環であった。

次は，京都民科である。高校時代に松江民科に関わったことから，京大入学後に京都民科に入った。機関誌『新しい歴史学のために』に松尾の名が登場するのは6号（1952年3月）以降である。研究部会（近代史部会）で井上清『日本現代史』（Ⅰ）について報告した内容要旨が掲載された[43]。

最後が日本史研究会である。入会時期は不明で，委員就任は卒業後の1955年以降である。松尾によれば，「どうも僕なんかも，日本史研究会の近代史部会に出た記憶があんまりなくて」と言っているので[44]，学部時代は民科の活動が主であったと思われる。

松尾は1953年3月に大学を卒業した。卒論のテーマは「米騒動の一考察」であった。苦い思い出のようで，「もどかしいほど卒業論文が書けず，したがって不出来」だったと語る[45]。執筆にあたり，松尾は3回生時に，渡部徹（京大人文科学研究所教員）のもとに資料を借りにいった。「戦後，雑誌から切取った関係文献四，五点をファイルした一冊と大原の『日本労働年鑑』の第一巻」である[46]。

人文研教員と文学部学生はすぐにつながらないが，松尾は「経済学部の社会政策ゼミに顔を出していた岸本英太郎教授の紹介だったのでしょう。」と振り返る[47]。これ以前，松尾は「明治維新以降を研究対象とする学生は，異端視される傾きがあった」ことから，経済学部の堀江英一ゼミにも出ていた[48]。国史出身では初参加で，以後，国史出身で近世・近代史専攻の学生

は堀江ゼミに入るのが通例になっていったという[49]。

卒業後の進路は，「田舎教師」を考え，父も地元で高校教師の道を用意してくれたが，これを断った。4 月から先輩を頼って，岡崎の京都府立図書館の臨時雇となった。「とにかく人の顔をなるべく見ずにすむところがいい」という動機からであった[50]。

同時に大学院に入学した[51]。これは大学図書館の利用と国鉄の学生割引利用のためで，夏休みの司書講習を受けての本採用を目指していた。

府立図書館に勤めてほどなく渡部から呼び出され，人文研の助手公募に応募してみないかと誘われた。人文研日本部では「日本の近代化」班が 1953 年 3 月で一段落し，新たな共同研究に向かう狭間の時期であった。同班の A 班（歴史研究部門）は坂田吉雄班長のもと，渡部，梅溪昇，田中裕，本山幸彦，後藤靖が所属し，文献史料による歴史研究を行っていた。

1953 年 5 月付で坂田が教授に昇進し，助教授 2 名（政治史・社会調査）と助手 1 名の補充を行うことになった。助教授の一人には井上清が 1954 年 1 月に赴任する。そして，助手公募に際して松尾に声がけがあった。

松尾は，渡部の研究室をよく訪問したわけでもなく，卒論を読んでもらったわけでもなかった。「思いあたるのは，拝借した資料をお返しするとき，表紙がはがれた『日本労働年艦』を製本し直し，菓子折りをそえて，お留守の机の上に置いて来たのが，先生の気に入られたのかな，ということだけ」とその感触を推察する[52]。ただし，松尾にしてみれば，渡部に対する義理で参加した受験であった。論文は提出自由で，筆記試験，言語試験，面接があった。「面接で河野健二助教授（とあとで判明する）から「答案は良く出来ている」とほめられたのには驚いた。坂田吉雄教授に「論文は提出したかと聞かれたとき，〔渡部〕先生が，うまくとりつくろって下さった。」[53]

結果は受験者 20 数人のなかから，松尾と加藤秀俊（補欠）が選ばれた。ただし，松尾は合格するとは思わず，合格発表も見に行かなかった。合格を知ったのは，発表 2，3 日後に渡部を訪問したときである。合格者本人が一向に来ないので，探していたとのことだった。合格を聞かされた松尾は「天にものぼった心地であった。」[54] 卒論で地獄を見たがゆえの感想だろう。一方で，「私の報告を受けた国史の某先生の，これは意外という顔付きを今でも覚えている。何しろ卒論の評価は「良」だったのだから。」と振り返る[55]。

けれども，万事順調とはいかず，入所前の身体検査で初期の肺結核と診断された。これで補欠の加藤が繰り上げ採用となった。9 月に再検査をして回復の跡が著しければ採用するという温情的な措置がとられた。

松尾は，北山茂夫から紹介された松田道雄の診察を受けて，化学療法に励んだほか，故郷に戻って療養した。療養中に，松尾は『資本論』1 部と 2 部，『原敬日記』，『銭形平次捕物全集』を読んだ。「これほど集中的に本を読んだことは後にも先にもない。」と語る[56]。結果，病状は

回復し，10 月 16 日に本採用となった。これにともない大学院を退学した[57]。

3　助手時代の研究環境

人文研日本部助手の主な仕事は，共同研究班の運営補佐であった。当初，松尾は「日本の近代化」班の現代社会班（班長重松俊明）に配属されたが[58]，1954 年頃から非公式に発足し，翌年には正式な班となる米騒動研究班（井上清，渡部徹，田中裕，後藤靖，松尾）に加わった[59]。また，57 年からは「大正期の政治と社会」研究班（渡部，井上，松尾，三宅一郎ら）に所属した（59 年 3 月まで）[60]。

松尾によれば，人文研は「大学院のようなもの」で井上，渡部が指導教員だった。「井上先生からは「戦略」を，渡部先生からは「戦術」を主として学んだ。私の学問の骨格はこの助手時代に形成された」と述べる[61]。井上，渡部を司令官と参謀長に比したことから[62]，戦略は研究目的，戦術は研究方法を指すと思われる。同班の研究成果は後述しよう。

その前に，当時の松尾を取り巻く研究環境（人文研，関連団体，人物）を見ておきたい。

まず職場の人文研からである。人文研は当時から党派性に縛られない組織であった。井上，渡部は共産党員だが，井上は国際派に近く，渡部は神山派であった。この 2 人をつないだのが非党員ながら「シンパ」で，主流派に近かった松尾である。

また，当時の西洋部には桑原武夫，河野健二，鶴見俊輔らがいた。もっとも共産党から遠いのが桑原で，河野は共産党員とされ，鶴見は思想の科学研究会員であった。

じつは，松尾は西洋部の人々とも交流があった。その交点となったのが日本映画を見る会である。同会は 1951 年に西洋部の多田道太郎，樋口謹一，鶴見が立ち上げたもので，日本映画を見て論評しあう非公式の会である（62 年頃まで続く）[63]。松尾は入所後参加し，幹事役を務めた。桑原やそのグループ（河野健二，上山春平，吉田静一，山田稔ら）も参加していたために，松尾は自らを「桑原グループの院外団」と称した[64]。

松尾が言うには，会はまず思想の科学研究会メンバーで設けられ，「その専門や思想の如何を問わず，思想の科学研究会に同調する人たちに限定されていた」という[65]。松尾の思想的な柔軟さを伺うことができる。また，「桑原グループ特有の，何でも見て，知って，書いてやろうという積極果敢なアマチュア精神の洗礼を受けたことは，私の青年期の収穫の一つであった」と語る[66]。

一方で，松尾は井上清を中心とするレーニン全集を読む会に参加していた。井上が 1954 年 1 月に人文研の日本部に赴任したことは述べた。人文研教員は文学部で授業を持つこともあったが，「札付きのマルキスト」を警戒して文学部側は授業担当に招かなかった。松尾によれば，「当時の貝塚茂樹研究所長にたのまれて国史研究室の院生に，文学部と人文研の関係がまずく

なるから，井上さんの招聘運動を起こさぬようにと説得に行きました」と振り返る[67]。このため，若手の研究者が井上に呼びかけて生まれたのがレーニン全集を読む会だった。なぜレーニンだったかを裏付ける資料はないが，スターリン批判後におけるレーニンの再読という意味があったと思われる。

井上は赴任後，鹿ヶ谷に家を購入し，この二階で会は開催された。時期は，1956，7年から60年安保を挟んで前後5，6年継続したという。メンバーは松尾のほか，中塚明，江口圭一，松浦玲，岩村登志夫，里上龍平，芝原拓自，鈴木良，安丸良夫，佐々木隆爾，広田昌希，同志社大の山本明，君村昌君など，京大の助手・国史の院生，同志社大の院生だった。後半は井上は参加せず，若手主体になる[68]。「レーニンがこつこつ書いた時評や政治評論，時期的には一九〇五年の第一次ロシア革命から一七年の第二次革命までの間のもの」を読んだという[69]。社会主義革命の前提としての，帝国主義に対する民主主義の闘争の重要性を説いたもので，のちに松尾の大正デモクラシー研究や普選運動の研究に転用されていく。

レーニン全集を読む会の人々は，日本史研究会に所属していた。松尾も55年以降研究，編集委員に就任し，運営に関わった。回想によれば，林屋辰三郎の家の離れの2階が編集委員会の開催場所で，「実質的な編集長」である門脇禎二に鍛えられたという[70]。

1956年頃（六全協前とする文献もある[71]）には，日本史研究会の近代史部会有志が，『続日本紀研究』に刺激されて会報発行を計画したことがあるという。しかし，実現はしなかった。「ある先輩に三号分くらいの原稿を揃えてから発行するぐらいでないと，三号雑誌で終わってしまうと警告され，また政治的圧力らしきものもあって，沙汰やみになってしまいました。」と松尾は振り返る[72]。「ある先輩」は井上清だったことを後年明かすが，「政治的圧力」の方は不明である。

ちょうど共産党の第6回全国協議会（以下六全協，1955年）前後であること，主流派と国際派の対立が国民的歴史学運動にも及んでいたこと，六全協の両派統一によって，運動に関わった歴史研究者の梯が外されたことなどが関係していよう。松尾は，六全協後の近代史部会は「沈滞気味」だったと語る[73]。より具体的には，「あれ〔六全協〕で進歩的な歴史学の方でも，国民的歴史学に対する反省という事が広範に起る。一方その反面急に自信を失ってしまったという所があってそれがかたや実証主義の全盛と重ってきたと思うのです」と語る[74]。

次に人文研以外の人物としては中野重治がいる。松尾は1953年10月に北山のすすめで中野の『話すことと書くことと』（東京大学出版会，1953年）を買って以降，「やみつきになった」[75]。本人と直接会ったのは翌年の北山邸で，次の機会は北山の依頼で講演のために来京した中野を大原経由で案内した時だった。1964年以降は，世田谷の中野邸を訪ねるようになる。松尾は中野から人生や研究の指針を学んだと語る[76]。

この頃，松尾と関わった意外な人物として丸山眞男門下の松澤弘陽と藤田省三がいる。松澤

との出会いは鳥取一中時代である。「クラスも出身小学校もちがうのに，どういうわけか親しくなった。」[77] 2年生のときに，松澤は父親の転勤で宇都宮，鹿児島に移り，文通していたが，戦争の悪化とともに途絶えた。のちに松澤は松本高等学校をへて東大法学部に進学し，丸山門下となる。専門は明治社会主義の研究である。石田雄『近代日本政治構造の研究』（未來社，1956年6月）のあとがきに松澤の名前があるのを松尾が発見し，丸山研究室気付で手紙を送り，以後，松澤との交流が復活した[78]。

1957年10月に日本政治学会大会が大阪市立大学で開催され，丸山をはじめ松澤，藤田ら門下生が関西に来た。松澤は松尾の自宅を訪ねて，14年ぶりの再会を果たした。松尾もこのとき今井清一，井上清とともに，下鴨の宿泊先にいた丸山を訪問した。翌日，松尾も学会に参加するために大阪で丸山一行と合流し，会場に着いた。そこで松澤から紹介されたのが藤田だった。「松澤君に再会したこと，そして藤田君を知ったことは，私の学問的人生にとって大きな出来事であった。」と松尾は振り返る[79]。

先述の通り，松尾の大正デモクラシー研究は必ずしも学会で受けが良いわけではなかった。これを励ましたのが2人であった。松尾は，「京都で孤立しがちな私はマルキストになり切れず，また理論家でもありません　私を遠くからはげましてくれたのはこの両君でした」とか，「日本史研究会を中心とする京都の学界では主流になかった私の仕事を〔松澤は〕一貫し支持しはげましてくださった。初対面のときから終生私の仕事を燻し銀のようだと評価してくれた藤田省三君」などと語る[80]。

さらに，藤田を介して，丸山眞男との出会いが生まれた。松尾は，以前から丸山という知識人に対して強い関心を持っていた。

> 私は，学者丸山眞男以上に知識人丸山眞男の生き方に強い関心を抱いて来た。父母双方から受けた国民主義の熱い血が，戦時下の少年時代から蓄積されたヨーロッパの知性に濾過され，学問とそれと不可分の時論において，人間の進歩に対する確信のもとに，「現実」主義の陥穽にはまることなく，「主人持ち」でない自由な筆を通して発現して行く，その全過程である。[81]

「国民主義の熱い血」とは，陸羯南の新聞『日本』や政教社の関係者である父母のもとで丸山が育ったことを指す。ここからは想像だが，「国民主義の熱い血」が「ヨーロッパの知性に濾過され」ていくのが，かつて愛国主義から戦後民主主義へと向かう松尾自身の理想の知識人像としてあったのではないか。

『日本』には丸山にとって叔父にあたる長谷川如是閑も参加していた。『大正デモクラシー』（1974年）の「はしがき」では大正デモクラシーを厳しく評価する長谷川如是閑が批判されて

いたが，これは丸山眞男を意識したものであった[82]。丸山の著作が松尾の大正デモクラシーの研究に影響を与えていることは後述したい。

4　米騒動研究班と労働運動史研究

ここからは松尾が関わった共同研究について見ていこう。松尾は，共同研究に従事することから歴史研究者の歩みをはじめる。ひとつは米騒動，もうひとつは労働運動史の共同研究である。

前者は 1954 年頃からはじまり，渡部徹・井上清編『米騒動の研究』全 5 巻（1959 年）として結実した。同著は各地域の米騒動の実態を大原社会問題研究所所蔵の細川嘉六旧蔵資料や新聞，統計を用いて実証的に描いたものである。松尾は愛知県，京都府，三重県，兵庫県，岡山県，鳥取県（田中裕と共著），広島県，山口県（後藤靖と共著），朝鮮，「米騒動の取締りと鎮圧」「米騒動研究のあゆみ」といった各地域，分野を担当した。

これに付随する形で，米騒動の研究を発表した[83]。先行研究として松尾が批判したのは片山潜の米騒動観である。片山は米騒動が現代革命運動の火蓋を切ったとするが，松尾は「前時代的な人民層」を主体とする暴動に終わったと解釈した。このような状態では「前衛党」の存在は不可能だが，米騒動は革命の諸条件（諸運動の発展，天皇制との矛盾関係，原内閣というブルジョアを絶対主義から引き出す）を作り出し，前衛党の成立に寄与したとした。

注目すべきは次の一文である。「毛沢東の実践論を適用すれば米騒動はまさに日本革命運動の感性的認認〔ママ〕の最後の段階であり，これをのりこえることによりはじめて理性的認識の段階に入ったのであり，その意味で日本近代史上画期的な事件といえると思う。」[84] 松尾はマルクス，レーニンを読んでいても，論文では言及してこなかった。そう考えると毛沢東への言及は異例である。『実践論』は 1952 年 10 月に翻訳され，国民的歴史学運動の理論家，運動家に大きな影響を与えた。本論が 1954 年に書かれたことを考えれば，松尾にとって，米騒動の研究は，国民的歴史学運動の一環としてなされたことも考えられよう。

しかし，六全協後はこうした言及は姿を消す。56 年の米騒動の研究では，米騒動によって，「民衆の階級的な成長」「社会運動の全面的開花」（労働運動〔友愛会〕，部落民の自主的な解放運動，学生運動，普選運動を指す），「労働者・農民・学生を中心に，政治的自由のための闘争が普選運動という形でもり上つたことを忘れてはならぬ。」と述べられた[85]。新たな着眼点が，当時の歴史研究でさほど評価されていなかった友愛会と，大正デモクラシーの定義と関わる「政治的自由」という概念であった。

前者は，丸山眞男の影響と，後述する労働運動史研究の成果だと考えられる。実際，松尾は「日本労働組合運動の源流たる友愛会の発展過程を大正デモクラシーの基礎過程として位置づ

けることに確信を与えたのは，今では稀覯本となっている『政治の世界』（一九五二年）であった。」と言明する[86]。松尾はすでに古本屋で購入していたが，「一九五三年夏」に丸山から署名入りで献本された[87]。同著で，丸山は，民主主義の機能における「民間の自主的な組織（voluntary organization）」の重要性を指摘したうえで，「労働組合こそは現代社会における大衆の原子的解体に抵抗する最も重要な拠点でなければなりません」と述べる[88]。ここに松尾は触発されたと考えられる。

後者の「政治的自由」も『政治の世界』にわずかだが言及がある。丸山は，戦前の日本史を遡りながら，「「末は大臣大将」という抜け駆けの功名心によつて階級的連帯意識の成熟がチェックされると同時に，そうした未来の夢が政治的自由の欠如を心理的に補完する役割を果した」とする[89]。丸山に言わせれば，「立身出世主義と国家主義」の癒着，「政治的自由の欠如」がのちに「ファシズム」を招来するのであった[90]。それゆえ，「政治」は議会参与だけに限定されているわけではない。

> いわゆる民主化の過程というのは，この意味で何より権力配分の過程，逆にいえば，被治者の権力参与の過程として現われるわけです。近代国家に於てこうした権力配分過程を具象化しているのはいうまでもなく，代議政治（Representative government）の発達でした。しかしながら代議政治を具象化している議会は単に人民の力の結集点でなく，先に権力の組織化の所で申しましたように，一面ではどこまでも統治組織の構成要素なのです。この面を忘れると，あたかも代議政治によつて，支配関係が解消したかのような幻想が生まれます。[91]

丸山は，統治組織に収斂しない多様な「人民の力の結集点」を求め，そこに「民主化」の習熟度を見ようとした。これは松尾自身の問題意識とも重なるものであった。

次に取り組んだのが労働運動史研究である。人文研の渡部徹は京都地方労働運動史編纂会（代表者朝田善之助，編纂会の住所は人文研内）に関わっていた。結成経緯は朝田によれば，「この事業に協力を求められた当時の実践活動家達（主として京都旧友クラブ）が，京都府・京都市・総評・民間労・京大人文科学研究所等を結集し，編纂会を成立させ」た[92]。

松尾も入所以後，編纂会に属して，渡部らと調査と執筆を推し進めた。週末は渡部らとともに聴き取りに通う時期が続いたという[93]。この膨大な聴き取りと資料収集・調査をもとにして1959年に刊行されたのが『京都地方労働運動史』である。松尾は同著の第二編「組合運動の生成と発展（大正二年－一四年）」を担当した。

渡部によれば，同書は，執筆から刊行まで2年を要した。松尾も1957年頃から執筆しはじめたのであろう。56年から翌年にかけて労働運動史に関する研究発表や論文執筆が多くなる。

第一に城南争議の研究である。先の京都地方労働運動史編纂時の聴き取りや収集資料に基づいて争議発生の誕生と過程，山本宣治の登場までをまとめたもので，『日本史研究』27 号に論文が掲載された[94]。

第二に友愛会の研究である[95]。これは先述の通り，米騒動の研究から得た着想であった。松尾は，同じ鳥取出身の松岡駒吉のもとに聴き取りや資料閲覧で伺うことで，既存の友愛会像に疑問を抱くようになる[96]。当時，友愛会は，「労働組合と呼ぶに値しない微温的なものであるという一般の先入見」があった。しかし，松尾は「友愛会が初期の共済・修養団体的性格をぬぐい去つて，次第に労働組合としての性格をあらわして来たこと」を明らかにした[97]。

友愛会の研究は，その後の大正デモクラシー研究へとつながっていく点で重要である。

> かくて友愛会におけるインテリの役割は依然として大きかった。しかしそのインテリの性格は従前よりよほどちがっていた。日露戦争後，農村の寄生地主および都市のブルジョアの子弟に，高等教育をうけるものが急増した。彼らは自由主義思想の洗礼を受け，非特権資本，中産階級代の[ママ]弁者としての役割を果たした。いわゆる大正デモクラシーの推進力は彼らであった（この事実をはじめて的確に指摘したのは，井上清，鈴木正四両氏の「日本近代史」である）。[98]

松尾が依拠した，井上清，鈴木正四の『日本近代史』上・下は，1955 年 12 月と翌年 6 月に刊行された（他の著者は藤井松一，藤原彰，藤田省三）[99]。同著は，明治維新以降の資本主義の成立，資本主義から帝国主義への移行，日本資本主義の全般的危機，そして日本帝国主義の崩壊という流れを「史的唯物論の方法」に基づいて描いた通史である[100]。独占資本主義の成立以前に帝国主義が成立し，日露戦争後に独占資本主義の段階に入るという歴史観が採られた。同著で目を引くのは，井上清が「はしがき」で記した以下の自己批判である。

> また，一方進歩的な学者も，往々にして，わが先人のたたかいを，きわめて偏狭な観点からとりあげ，評価してきた。そのために，最先頭の，もっとも勇敢な人々や党派，あるいは抽象的な偶像化された「人民」あるいは「労働者農民」だけを進歩的とし，それについては，しばしば欠陥やあやまりすらも美化するにつとめ，その他の無数の，わが国の進歩発展に貢献した人々や勢力については，これを無視したり軽視したりしてきた。これは歴史の真実を明らかにする道ではない。私自身も，このようなまちがった傾向をもっていたが，いま，それをきっぱりとあらためるつもりである。[101]

ここから，松尾の言う，「自由主義思想の洗礼を受け，非特権資本，中産階級代の[ママ]弁者とし

ての役割」をこれまでより積極的に評価する姿勢（「革命」主体の一翼としての評価）が生まれていく。ただし，『日本近代史』では，「大正デモクラシー」概念は登場していない。吉野作造の「民本主義」も「妥協的民主主義」とされた[102]。松尾は同著の影響を受けながら，より一歩踏み込んでいたことがわかる。

5　大正デモクラシー研究の始動

ここからは松尾の個人研究に移ろう。1957 年 4 月から人文研の助手も公式に個人研究が認められた。松尾のテーマは，「第一次世界大戦前後の日本における民主主義運動の研究」である。同時期に日本部で始まった「大正期の政治と社会」研究班に合わせたと考えられる。

テーマ選択の背景には，戦後民主主義に対する問題意識があった。普選運動の聴き取りをするために同郷の佐々木惣一（京都大学名誉教授）を訪ねた松尾は，思わぬ問いを投げかけられた。

> まさに辞さんとしたとき先生は問われた。「君はなんのためにこういうことを研究するのか」。不意をつかれた私は，「誰もこういうことを調べないからです」と答えた。「君，学問はそんなことでできるものですかね」。この一言はまさに雷のごとくであった。口ごもりながら私はつぎのように弁明した。「戦後の民主主義は占領軍によって移植されたものだ，と一般にいわれている。しかし日本には，戦前あるていどにせよ民主主義の発展があり，それが現在の民主主義の基礎になっていると思う。自分はこの民主主義の伝統を明らかにしてみたい」。[103]

松尾にしてみれば，胸をついて出た「咄嗟の言」だったが，「以後私自身のものとなった」[104]。今日から言葉を補うならば，日本の民主主義から帝国主義の影響をいかに排除するかだと考えられる。すなわち，アメリカ帝国主義による民主主義の移植を批判し，戦前の日本に民主主義の伝統を求める。ただし，その民主主義は日本帝国主義に汚染され，ファシズムに押しつぶされた。では，そうならない民主主義の可能性はありえたのかを日本の歴史の中に求める，というものである。このように考えると，民主主義の達成は，国民や民族の自立と併行するものであった。

本論では，松尾の大正デモクラシー研究を，あえて分けることで立体的にとらえることができるのではないかと考える。大正デモクラシー研究①（1960 年前後）から大正デモクラシー研究②（1965 年後半）へ展開していくなかで，そこに知識人論，政治史研究，帝国主義研究が併置されているという見取り図である。

1960 年前後の大正デモクラシー研究①では松尾の問題意識が集中的に述べられた。ここで

見たいのは「大正デモクラシー研究の展望」（『新しい歴史学のために』51号，1959年4月）における先行研究の整理である[105]。

この論文で，松尾は共産党六全協の影響を指摘する。六全協後，「三二テーゼ」の相対化（例えばブルジョア＝反動という図式や社会ファシズム論）や，共産党に非ざれば人にあらずという思い上がりやコンプレックスが除去されていったという[106]。

32年テーゼに代わって，松尾が評価するのが1922年の日本共産党綱領である。大正デモクラシー研究者である信夫清三郎の言う「デモクラシー運動に労働者階級の指導権を確立」すべきことを主張したのは山川ではなくて，かの1922年の「日本共産党綱領草案」であったとする。この綱領を「大正デモクラシー当時，日本の政治状況を分析した第一級の作品として再評価する必要がある。」と言う[107]。

じつは当時，同綱領にいち早く着目したのが，井上，鈴木らの『日本近代史』であった。井上は同綱領が国家機関の「権力を倒すために，労働者・農民のみならず，自由主義ブルジョアジーをも動員できるし，かれらの限界をたえずばくろしながら，かれらを活用しなければならないとした」と述べた[108]。

こうした『日本近代史』の観点を松尾は受け継ぐ。「北山・井上両氏によって，運動の起点は明治末に求めるべきこと，そのにない手は産業資本以下の民衆で，独占・特権ブル・大地主の政党の政権獲得運動とは区別さるべきこと，運動の成果がブル政党に握られたのは左翼勢力の未熟にあることが指摘された」と評した[109]。いうならば，「自由主義ブルジョアジー」を留保付ながら革命主体の周辺に加えながら，その運動を引き継げなかった革命主体本体を批判的にとらえ，その原因を究明しようとした。ここが松尾の大正デモクラシー研究の出発点のひとつとなる。

もうひとつ見逃すべきではないのは，60年安保闘争の影響である。1959年から翌年にかけて全国的にわき起こった運動の波は，歴史学会にも押し寄せた。1960年11月に開催された日本史研究会の大会のテーマは「歴史変革の主体と条件」であった。報告を担当したのは上田正昭（古代），工藤敬一（中世），安丸良夫（近世），松尾（近代）である。

松尾の報告「大正デモクラシー期の政治過程　普通選挙問題を中心に」は『日本史研究』53号（1961年3月）に掲載された。その意図は「この時期の主要な政治問題の一つであった普通選挙法をめぐる政治闘争（一九一九―一九二四）の様相を，とくに一九二一（大正一〇）年以降について分析することにより，いわゆる「大正デモクラシー」を推進した力，阻んだ力，その歴史的意義等の問題を明らかにすること」である[110]。

大会テーマをやや単純化していえば，歴史的革命主体の再設定による革命戦略の練り直しである。松尾の論稿にもこの傾向が見られ，先述の『日本近代史』の井上の自己批判と共鳴したものであった。

大正デモクラシーの基底を形成したのは，自らを組織化するにいたった労働者・農民・市民（開明的中小資本 —— 小ブルジョア層）であった。彼らの民主主義への志向は，社会主義者の適切な指導があれば独占資本・地主・天皇制の帝国主義的専制支配体制に対決する政治的自由獲得の統一戦線に結集しうる可能性を含んでいた。[111)]

繰り返せば，丸山に依拠したと思われる「政治的自由」は，議会参与をもって達成されるわけではない。「あらゆる民主主義勢力の結集」によるたえざる獲得が必要であった。これは本論の構成からも明らかである。地方にまで視野を広げた「民本主義的市民政社」「農民組合」「労働組合」及び，それらを主体とする「政治的自由獲得統一戦線の可能性と挫折」，そしてこの動きに対する「支配階級の対応」としてまとめられた[112)]。

特徴的なのは「市民」への言及の多さだろう。マルクス主義歴史学では，資本家に対抗するプロレタリアートを革命戦略で重視するために，市民や市民社会の意義が過小視されてきた。松尾はそこに目を付けたのである。

しかし，その革命を実現する方法は，「先進的労働者」や「社会主義者」の「指導」を前提とした統一戦線であった。これでは「あらゆる民主主義勢力」が周辺化され，革命的主体の補完的勢力になるという問題点を抱える。

6　自由主義，社会主義，国民主義

松尾は，大正デモクラシーの先行研究，枠組みを踏まえて，知識人論に進む。山本宣治のほか，広い意味での自由主義者とみなして，美濃部達吉，夏目漱石，ルソー誕生記念会を取り上げた。

まず天皇機関説の提唱で知られる美濃部達吉である[113)]。この美濃部論で，松尾は「自由主義」視点を導入して，「市民的自由の側面」に着目した。これにより，大正デモクラシー研究の方法に新たな示唆をもたらし，「大正デモクラシーはもっと内容の豊富なものとなり，質的にも，その歴史的性格の再評価を迫られるのではなかろうか」と述べる[114)]。安保闘争以後に普及する「市民的自由」の文言と大正デモクラシー研究を接合する試みと言える。

むろん，自由主義のみではない。ルソー誕生記念会の研究を見れば[115)]，社会主義者と自由主義者の「協力関係」を重視していた。「社会主義者と，政治的自由を要求する市民との協力関係が，明治三〇年代より米騒動にいたる，前期大正デモクラシー運動の底辺を形成していた。」[116)] よって，ルソー記念会を「大正デモクラシーの先駆的潮流の一波頭」とする[117)]。

山本宣治の研究は，労働運動史研究の流れを引き継いだものである。聴き取りや資料調査によって，「共産主義運動の英雄とは別の，民衆に根を下ろした，行動的な市民科学者山宣のイ

メージ」が湧き上がってきたという[118]。ここには，吉野作造らのイメージが先行する大正デモクラシー研究において，「土着の ――民衆生活に根を下ろした―― インテリの姿」を位置づけたいという松尾の思いがあった[119]。

松尾が夏目漱石を取り上げたのは，彼の「天皇制と財閥の専制に筆誅を加えることを自己の使命とする立場」が「自ら社会主義者との連帯感」を生んだことを明らかにするためである[120]。漱石の立場を社会主義者と自由主義者の提携の延長線上に位置付けることで，政治，経済，運動に傾斜する大正デモクラシーを文化の側面から明らかにした論稿といってよい。

あわせて見逃せないのが，漱石論のなかで「国民主義」に触れた点である。この概念の初出は，松尾が丸山眞男に言及したときである。松尾は，彼の父丸山幹治に触れながら，「私はかねてより，大正デモクラシーの思想の源流の一つは，羯南の国民主義にありと考える」と述べている。

すなわち，社会主義と自由主義の提携を核としつつも，そこに「国民主義」も含ませるのが松尾の描く大正デモクラシーであった。松尾は，「大正デモクラシー思想の源泉の一つに明治中期の国民主義（ナショナリズム）を数える発想も，「陸羯南　人と思想」（一九四七年）から得た」として，やはり丸山の影響をあげている[121]。

同論で，丸山は，羯南の思想を「後進民族の近代化運動が外国勢力に対する国民的独立と内における国民的自由の確立という二重の課題を負うことによつて，デモクラシーとナショナリズムの結合を必然ならしめる歴史的論理を正確に把握していた」として，その近代的な進歩性と健全性を評価する。そのうえで，丸山は「長きにわたるウルトラ・ナショナリズムの支配を脱した現在こそ，正しい意味でのナショナリズム，正しい国民主義運動が民主主義革命と結合しなければならない」と現代の民主主義へ活かす可能性を見出した[122]。この問題意識と方法を松尾は大正デモクラシー研究のなかでも生かそうとしていた。

次に政治史研究に移ろう。松尾は 1960 年の日本史研究会の大会報告をもって，「これが私の社会運動史から政治史への転進の始まりです。」と語る[123]。具体的には政党政治，原敬，過激社会運動取締法案などの研究に取り組んでいく。そのひとつ「政党政治の発展」（1963 年）は，原敬内閣から山本権兵衛内閣を経て第二次護憲運動にいたる政治と社会運動（米騒動，普選運動）の関係を考察したものである。

一方で，松尾は，「従来「政党政治」と「大正デモクラシー」の両概念をほとんど同一視する傾向が，きわめて濃厚であるように思われる」と述べ，大正デモクラシー研究を政治史に傾斜してとらえることに疑問を抱いていた。政党を大正デモクラシーの主役，もしくはそのひとつとして把握し，それと「絶対主義的勢力（天皇・軍部・官僚・貴族院・枢密院等）」[124] との抗争が大正デモクラシーの内容だとする研究への違和感である。

既述のように，松尾は丸山の『政治の世界』に依拠して，「民主化」は議会参加だけでは不

十分であり，組合など「民間の自主的な組織」の重要性を提起していた。この考えはここでも継承される。松尾は，「大正デモクラシーとは，その主体は，政党でも，ひと握りのインテリでもなく，大正期における広汎な人民諸層（労働者・農民・小ブルジョアジー・中小資本家の下層）を主力とした，政治的自由獲得をめざす運動」と定義する[125]。この運動の先にあるのが，言論集会結社の自由であり，普通選挙の獲得であり，「絶対主義的機構の変革による議会主権国家の実現」であった[126]。60 年の時点では，ある上位の組織・人物の「指導性」を前提とした民主勢力の結集が述べられたが，63 年では「指導性」は以前より相対化されて，「人民諸層」の自律性が強調された（あわせて市民という文言も消えている）。

他方で，「人民諸層」が手放しで掲揚されたわけではない。これが検討されるのが帝国主義研究である。1960 年代は帝国主義研究が盛んで[127]，その後もこの傾向は強まり，64 年の北京シンポジウムへの取り組み，翌年のアジア・フォード財団問題などが起き，近代化論批判が高まっていく。

松尾が選んだ研究対象は，関東大震災の朝鮮人虐殺問題，五四運動と民本主義者の関係，日本の基督教の朝鮮伝導などであった。63 年は関東大震災の朝鮮人虐殺から 40 年だったこともあるが，大正デモクラシー研究で見すごすことができない問題であった。松尾は「帝国主義の害毒は，本来善良であるべき民衆をも侵しうるが故に，ますますおそれるべきものであると指摘したい」として「われわれ日本人民」は「少民族に対する差別・侮蔑意識を脱しえた」と言えるのかと問題提起した[128]。

この検討はいわゆる民衆だけではなく，吉野作造ら「民本主義者」にも及ぶ。これまで民本主義はその定義から天皇制との関係から検討されたが，帝国主義との関係が重要であることを提起した。というのも，「天皇制は単なる絶対主義権力ではなく，帝国主義の国内・国際支配体制の主柱として存立している」からである[129]。松尾は吉野を検討するなかで，「帝国主義時代のブルジョア民主主義のもつ不可避的な限界」を認めるが，他方で中国革命運動への共感などに見られるように，「この限界を一歩ふみ越えて，被支配民族と手を結んで自国の権力と対抗するという姿勢を示しえた」ことを評価した[130]。

これまでの松尾の大正デモクラシー論をまとめると以下のようになろう。まず① 大正デモクラシーの源流のひとつには「国民主義」がある，② 天皇制（絶対主義権力）及びその支持勢力と帝国主義の変革を目指すものである，③ この変革は社会主義者と自由主義者の思想・運動の提携を通してもたらされる，④ そこには非抑圧民族の解放運動も加わりうる，というものである。

このように考えると，松尾の大正デモクラシーは，丸山と同様にあるべき近代化をモデルとしつつ，いかにしてその道筋を歴史に求めるのかが考えられた。その役割を担うのが理念化された「国民主義」，社会主義，自由主義であった。ただし，実際の研究では社会主義と自由主

義がもっぱら検討対象となる。両者の提携，協力によって天皇制や帝国主義をいかにして打ち破っていくかが検証された。

7　大正デモクラシーの研究と近代化論

松尾は1960年代後半に，まず『大正デモクラシーの研究』を公刊した。これ以外に論文として，「Democracy in the Taisho Period」（『The Developing Economies』4号，1966年12月），「大正デモクラシー」（直木孝次郎，中塚明編『近代日本をどうみるか』上，塙書房，1967年）を発表した。

初の単著となる『大正デモクラシーの研究』は，「一　普通選挙運動の史的考察」，「二　友愛会史論」，「三　大正デモクラシーの先導者たち」の3部から構成された論文集である。1部は普通選挙同盟会の軌跡について書き下ろしたもの，2部は友愛会研究をまとめたもので『史林』『人文学報』に掲載された。3部は美濃部達吉，明治末期のルソー，民本主義者と五四運動からなり，井上清編『日本人物史大系』7巻，『思想』，桑原武夫編『ブルジョア革命の比較研究』にそれぞれ掲載された。

これらの運動，団体，人物を大正デモクラシーに位置づけることが本書の大きな目的である。「まえがき」で，大正デモクラシーの定義として「日露戦争後より大正末年にかけて，日本の政治・社会ないし文化の各方面に顕著に現われた民主主義的傾向をさすが，その推進力となったものこそ，広汎な民衆 ―― 都市中間層を中核とし，労働者・農民および特権をもたぬ新興の資本家をふくむ ―― の政治的自由獲得をめざす運動」と記された[131]。「文化」にまで広げた考証，時期が日露戦後から大正末年に設定されたこと，市民や統一戦線といった安保闘争後の影響が定義から脱色されたこと，都市中間層への言及が新たな傾向として確認できる。

『大正デモクラシーの研究』は，大正デモクラシーの初期から中期にかけての社会運動や労働団体，人物を中心に論じたが，これは「自由民権より米騒動までをつなぐものは，幸徳事件より壊滅させられた社会主義者集団の運動のほかに何もなかったのだろうか」という自問への解答であった[132]。

本文では，「民主主義統一戦線組織」[133] 普通選挙同盟会における社会主義者と自由主義者の提携を論じたほか，吉野作造の中国観の検討を通して「日中民主主義運動の共同闘争」にも言及した[134]。また，友愛会を軽視してきたこれまでの研究状況につき，「歴史の根本的な推進力である大衆の地道なあしどりを見落としがちであった」問題が指摘された[135]。松尾は一見「進歩的」と見られないものを捉え直してその影響の広がりを見極めようとしていた。

先述のように，同著は，多くの反響をもって受け入れられたわけではなかった。『歴史学研究』で書評が出たが，『日本史研究』では出ていない[136]。理由を想像するに，本書は大正デモ

クラシーの全体像を見通すものではなかったこと，冒頭の大正デモクラシーの定義と本書の分野・論証が十分にかみ合ってないことが考えられる。くわえて，松尾自身が言う「日本史研究会を中心とする京都の学界では主流になかった」ことも関係したのかもしれない[137]。

松尾の大正デモクラシーを見通すうえで，重要な論稿は①「Democracy in the Taisho Period Taisho Democracy : Its Flowering and Breakdown」と②「大正デモクラシー」（直木孝次郎，中塚明編『近代日本をどうみるか』上，塙書房，1967 年）である。

①はアジア経済研究所の英文機関誌の特集「THE MODERNIZATION OF JAPAN Ⅱ」に発表された。松尾以外の執筆者は遠山茂樹，丹羽邦男，暉峻衆三，隅谷三喜男，塩田庄兵衛，柴垣和夫，中村隆英，丸山真男，生松敬三である。

じつは，両論文は大正デモクラシーの概説で，ほぼ同じ原稿である（①は英語圏の読者を想定した説明が多い）。ただし，①の冒頭の研究史整理は②では見られない。しかし，ここにこそ松尾の研究上の意図が垣間見られる[138]。

まずこれまで大正デモクラシー研究が貧困だった背景が 2 点あげられる。ひとつ目は，敗戦後の民主化が占領軍の圧力のもと急速に進められたことである。これにより，研究者は敗戦後の民主化を日本の民主的な伝統が実現したものだと考えることができなかった。2 つ目は共産党の 32 年テーゼの影響で大正デモクラシーが低く評価されたことである。代表的な研究文献として信夫の『大正政治史』があげられている。

60 年頃になると，大正デモクラシーへの学術的な関心が強くなってきた。この背景として，松尾は以前，六全協後における 32 年テーゼの相対化をあげていた。しかし，この場ではもうひとつの要因を指摘する。それは近代化論との関わりである。つまり，なぜ日本の近代化がアジアのなかでこれほど成功したかを解明するために，大正デモクラシーに関心が強まることになったというのである。

しかし，松尾はこの傾向に対して 2 つの「危険」性を指摘する。ひとつは，「日本の近代化の軍事的帝国主義的側面が見すごされるか，もしくは不十分な考察にとどまってしまうこと」，もうひとつは「大正デモクラシーが過剰に見積もられ，ブルジョア政党が大正デモクラシーの促進者として果たした役割が過剰に評価されてしまうこと」である。

松尾はさらに 60 年頃の研究傾向を 3 つに整理する。ひとつは，岡義武らの政治学（文献には三谷太一郎の研究も含む）で，原敬内閣成立の 1918 年から犬養内閣倒閣の 32 年までの政党政治の実現を大正デモクラシーの基本的な特徴とする考え方である。2 つ目は，信夫清三郎と松尾の研究である。日露戦後の 1905 年から第二次護憲運動後に加藤高明内閣が成立する 25 年までの，デモクラシーを要求する大衆の nation-wide 運動を大正デモクラシーの基本的な特徴とする考え方である。ブルジョア政党政治はこの運動の推進役としてはみなされない。3 つ目は 1 つ目と 2 つ目の折衷で，第一次護憲運動から第二次護憲運動までで，金原左門らの研究をあげ

る。

この整理から，松尾が近代化論（批判）との関係で大正デモクラシーを検討する必要を考えていたこと，岡義武らの政治学による，政党政治を中心とした大正デモクラシー研究に批判的であったことが明らかになる。松尾は，ブルジョア政党を近代化の推進者と見ることで，近代・現代の既成政党双方を連続して批判的にとらえていた。

①と②の違いをもう1点あげれば，大正デモクラシーの定義と関わる部分である。②では「The establishment of the parliamentary principle, and guaranteed freedom of speech, meeting, and association, that is, the abolition of the semi-feudal, controlling organization of the Emperor system（Tennō-sei 天皇制）」（議会主義の確立と，言論・集会・結社の自由の保証，天皇制の半封建的・支配組織の廃止）が，②では「普選と言論・集会・結社の自由の上にたつ立憲政治体制の確立」とあり，大正デモクラシーが天皇制批判の射程を持つことが抑制された。

この①②の論文は，松尾のアメリカ行きと関係する。1966年秋に京大人文研でハーバード大学燕京研究所の招致研究員に松尾を推薦することが決まった。しかし，松尾は動揺して，師の北山茂夫が強く勧めたにもかかわらず辞退した。当時はヴェトナム戦争の最中で，所属する歴史学研究会や日本史研究会ではアメリカに対する警戒があった。松尾は，この雰囲気に抵抗する勇気がなかったとも，ケネディ＝ライシャワー路線の懐柔政策に乗せられたと非難されることを心配したとも語る[139]。松尾が若いときから関心を寄せていたのは中国であったことも影響していた[140]。

こうしてアメリカ行きを断念したが，松尾はこの時にアメリカに行かなかったのは結果的に正解だったと語る。仮に行って戻ってきたら「大学紛争にまきこまれていた」し，「何しろ私の学問的系譜の上では祖父に当たる羽仁五郎氏が，全学連にアジテーターとして京大に乗込んで来たとき，私としては知らぬ顔で居れなかったであろうから」である。それゆえ，「一九六七年という年は，私の生涯にとって分岐点となった。」と回想する[141]。

アメリカ行を逡巡していた頃，松尾は藤田省三のすすめで1967年8月9日に丸山眞男に会いに行った。松尾は8月13日から19日までアメリカのミシンガン州立大学で開催された第27回国際東洋学者会議に出席することになっており，その前に丸山から情報を得るためであった[142]。松尾は同月17日に「近代の政治的発展」の分科会で「大正期のデモクラシー」と題して発表した。このときの発表原稿が，アジア経済研究所機関誌に発表したもの（①）の要約であった。原文も要約も義兄の岡本正介が反訳したと松尾は語っているので，日本語②の原稿を①に英訳，さらにその要約をアメリカで発表したことになる。

改めてハーバード大学燕京研究所招致研究員として渡米したのは翌年7月のことであった。その途次，ハワイ，カリフォルニア（バークレイ），スタンフォード，コロンビア，プリンストン，マサチューセッツ，デュークの各大学を訪問した。アメリカ滞在は69年6月までとなる。

帰国の途中，ヨーロッパの各都市（ミラノ，フィレンツェ，ローマ，ロンドン，シェフィールド，ケンブリッジ，パリ，ハンブルク，リューベック）を訪問した。訪問先では，自らの大正デモクラシー研究について日本研究者と意見交換したと思われる[143]。

8 「急進的自由主義」の研究

松尾は海外の研究者を前に大正デモクラシーの概略を示しつつ，実証史家として日本近代史をいかに描き直すかに取り組んだ。60 年代末には『シンポジウム　日本の歴史　二〇　大正デモクラシー』刊行に先立ち，「民本主義と帝国主義」の題で報告し，討論に参加した。江口圭一が司会で，飛鳥井雅道，今井清一，木坂順一郎，金原左門，松尾の面々である。

松尾は，「新憲法おしつけ移植論みたいなもの」への抵抗感という「初心」を忘れずに，「日本においても非常に歪められた，どろどろしたようなかっこうのものであっても，内発的な民主主義への要求と運動があったんだということの検証をこれからもやっていきたい」（特に部落問題をあげる）こと，自分と重なる「プチブル層」が「過去をどう生きたかということを自分の生き方の問題とからませて検討してみたい」こと，「大正デモクラシーの指導理念としての民本主義というものがいったいどういうものであったか」を検討したいと語る[144]。松尾にとって，大正デモクラシー研究とは自らの生き方と関わる問題であった。

渡米から帰国後，松尾の待遇に変化があった。松尾は人文研の助手を 13 年間つとめ，1965 年から講師に，70 年 5 月に助教授に昇任した。77 年に退職となる井上清の後任であった。松尾は「稀に見る幸運」と語る[145]。

それと重なるように，70 年初めには京大文学部現代史講座の今津晃から文学部への異動を誘われた。66 年新設の同講座の日本史担当である。松尾は，北山茂夫に相談したところ，学生あっての教員だと後押しされた。所内の渡部にも相談して同意を得た。所長の島田虔次にも相談し，松尾は引き留められることを期待していたが，意外にも賛同された[146]。

松尾自身もこのまま人文研にいたら自分が駄目な人間になってしまうと思わせる事態に出くわしたという。具体的には，「私が紛争中の文学部にあえて移った遠因の一つには，義理にからまれて二つの研究班に加わらなくなったことがあげられる。」と語る[147]。多忙になって自らの研究がおろそかになることへの危惧である。

こうして，1971 年 1 月に文学部に異動し，以後 93 年 3 月までつとめた。異動してからも，人文研の共同研究班との関係は続いた。アメリカ滞在から帰国した松尾は，引き続き，井上清，渡部徹が主催する『東洋経済新報』（以下，『新報』）の研究班に関わった。

同研究会は，もとは文科省の科学研究費の特定研究の助成を受けて「明治・大正・昭和における日本近代化の研究」として始まったものだった。人文研には「大正・昭和初期の時代思潮

と世論」が割り当てられた[148]。文科省の意向を汲むとすれば，いかに日本が近代化に成功したかを立証する研究が望ましかったはずだが，急進的な『新報』を取り上げたところが人文研の共同研究らしいと言える。

『新報』の共同研究班は松尾の帰国後に正式発足したようで，「人文研の共同研究で正式に『東洋経済新報』をとりあげたのは私がアメリカから帰ったのが一九六九年夏なのでその直後と思われる」と振り返る[149]。この研究会の成果が井上清・渡部徹編『大正期の急進的自由主義 『東洋経済新報』を中心として』（東洋経済新報社，1972 年）である。

ただし松尾は，『新報』に早くから着目していた。最初にその存在を知ったのは『歴史学研究』151・153 号（1951 年 5・9 月）に載った井上清「日本のソヴェート革命干渉戦争」からであったという[150]。

これ以外の文献として，長幸男の「日本資本主義におけるリベラリズムの再評価　石橋湛山論」（『思想』437 号，1960 年 11 月）をあげる。同論に対する松尾の評価は高い。「僕がこれまでやってきたことは，結局，長さんの敷いたレールの上を無意識に進んできたのかな，などと思った次第です。長さんがこの論文を書かれたのはちょうど六〇年安保闘争の直後で，「統一戦線」という問題がでており，長さんは，戦争前の天皇制ファシズムに対する国民的統一戦線を想定し，その一翼として，石橋さんの産業資本の立場を代表する経済論を位置づけ」と語る[151]。つまり，松尾の『新報』研究も「統一戦線」を意識していた。1968 年の大学闘争，1970 年前後からの革新自治体の登場とそれを実現する「統一戦線」に関心が集まりつつあった。そこで，改めて，『新報』の存在が着目されたのだった。

松尾は『新報』に関する論文を 1972 年頃に立て続けに発表した。先述の『大正期の急進的自由主義』に掲載された①「大正期の急進的自由主義『東洋経済新報』を中心として」以外に，②「日露戦争後における非軍国主義の潮流の一波頭」（高橋幸八郎編『日本近代化の研究』下（大正・昭和編），東京大学出版会，1972 年），③「大正デモクラシーの一水脈　石橋湛山とその先行者たち」（赤松俊秀教授退官記念事業会編『赤松俊秀教授退官記念国史論集』赤松俊秀教授退官記念事業会，1972 年），④「大正デモクラシーと石橋湛山先生」（『世界』336 号，1973 年 11 月）がある。②で日露戦後の，①で大正期の『新報』に着目し，④で石橋湛山の思想を描いて，③で『新報』の位置づけをはかった。

まず①から見ていこう。ここで，『新報』や三浦銕太郎の主張は，日露戦後の有力な社会層として登場しつつあった非特権資本家，中小商工業者，都市の新中間層の要求を代弁するものであり，「内に立憲主義，外に帝国主義」の地点を越えて，内において民主主義を主張，外においては非侵略主義・非軍国主義を提唱したとされた[152]。松尾の大正デモクラシーにとって，『新報』は願ったり叶ったりの存在であろう。

よって松尾は，②で日露戦後の自由主義を「立憲主義的帝国主義」などとする先行研究に異

議を申し立てた[153]。三浦の思想，『新報』の論調を調査すれば，吉野作造よりも先鋭な帝国主義批判を発見できるからである。よって，『新報』は日露戦後の立憲主義，個人主義，非軍国主義より構成される初期大正デモクラシーの風潮の最先端に位置づけられた。

他方で，『新報』には，初期大正デモクラシーの一特徴としての社会主義者と自由主義者との協力関係の典型的な例を見いだすことができると松尾は言う。ここには60年安保時の大正デモクラシー研究で出ていた「統一戦線」論が再び顔をのぞかせている。

次の④では，石橋湛山の思想を追う。松尾は，湛山の思想の特徴として，基本的人権の尊重，国民主権論（象徴天皇），非侵略・非武装をあげる。つまり，大正デモクラシー研究との関わりだけではなく，その先にある戦後民主主義や日本国憲法の理念にいかに接合するかが本論で検討された[154]。

最後に，③で『新報』の大正デモクラシーにおける位置づけを図る。松尾が吉野を超える先端として『新報』を位置づけようとしたことは既に論じたが，興味深いのは他の「水脈」に言及した点である。まず，陸羯南の「国民主義」に端を発し鳥居素川らの『大阪朝日新聞』論説陣に継承されるもの，浮田和民・海老名弾正から吉野作造へつながる日本基督組合教会の流派，美濃部達吉に代表されるドイツ国家学の系統につらなるもの，である。

そして，『新報』を中心とするイギリス自由主義の流れを汲む一派がここに加わる。すでに，吉野，美濃部の流れは『大正デモクラシーの研究』で論じたが，さらに評価しうる存在として『新報』が位置づけられた。「内には立憲主義，外に帝国主義」の大正デモクラシーの出発点におけるスローガンを「内には民主主義，外には非帝国主義」に転換せしめるためにもっとも早くかつ先鋭に論陣をはったのが『新報』とされた[155]。

同時に，『新報』は大正デモクラシーに幅をもたらしただけでなく，その先を見通すことにもつながった。民本主義を論じた吉野作造は1933年に亡くなったため，「大正」・「昭和」初期と「戦後」の接続は難しかった。それが『新報』の存在によって，大正デモクラシーと敗戦後の日本国憲法を接続することが可能になった。

9　『大正デモクラシー』の刊行

1970年代初頭，松尾は『新報』に見られた「統一戦線」に関する研究を立て続けに発表した。これらは，70年代前半の大正デモクラシー研究の先鞭をつけるものでもあった。統一戦線論の研究は，「忘れられた革命家 高尾平兵衛」（『思想』577号，1972年7月）と「一九二三年の三悪法反対運動」（渡部徹，飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』三一書房，1973年）に見られる。

高尾の経歴を辿ることが，「大正期の社会主義史，とくに日本共産党成立史の，アナ・ボル

対立ならざるアナ・ボル提携という，これまでまったく不問に付されてきた部分に光をあてる」とともに，「コミンテルンと日本社会主義運動との交渉」などについても新事実を提供するという[156]。

共産党を中心とする社会運動史観ではこぼれ落ちるアナキズム運動をすくい上げることにとどまらず，そのアナキストによって担われた「アナ・ボル共同戦線」[157]という新事実の発掘は，たしかに「大正」期の社会運動史を塗り替える可能性を秘めたものであった。

同じ頃，岩村登志夫（福本茂雄）がロシア語資料を用いて，コミンテルンとの関わりから日本の社会主義運動の捉え直しに取り組んでおり，彼と交流のあった松尾の論もその影響を受けていた。「日本」「共産党」の双方を問い直して運動史を刷新する試みである。

その拠点が京大人文研であった。松尾は，渡部徹を班長とする「社会運動の研究班」に加わっており，その成果が渡部と飛鳥井の共編『日本社会主義運動史論』であった。執筆者は富岡次郎，辻野功，松尾，渡部，岩村，斎藤勇，秋定嘉和，飛鳥井，太田雅夫，田中真人である。このうち富岡，辻野，岩村がコミンテルンとの関係から日英の共産党，労働運動を論じており，運動史の方法論的な挑戦が見て取れる。

評者の鹿野政直に言わせれば，「共産党中心になりがちであった従来の歴史解釈への批判を含んでおり，それにかわって執筆者たちは，ほぼ共通して，一党の私物化による運動の破綻を指摘し，統一戦線の可能性がいかにあったか，またいかにくずされたかを追究している」[158]。

松尾の「一九二三年の三悪法反対運動」は，雑誌『労働週報』（労働組合同盟会の共同機関紙でのちに関東大震災で虐殺される平沢計七が編纂）に注目して三悪法（過激社会運動取締法案，労働組合法案，小作争議調停法案）反対運動を描いたものである。この運動において『労働週報』が積極的な「中立性」を打ち出したことが明らかになった。すなわち「無産階級諸組織大半の総結集が実現したこと」「この運動は一九二〇年春の普選運動いらい三年ぶりの，無産階級の手による政治運動，とくに政治的自由のための運動であった」こと，しかし共産党は政治的自由擁護闘争の意義を充分把握できなかったことを指摘した[159]。

さて，こうした研究に続いて発表されたのが『大正デモクラシー』（岩波書店，1974 年）であった。同書に掲載された大正デモクラシーの定義を引いておく。

> 大正デモクラシーとは，日露戦争のおわった一九〇五年から，護憲三派内閣による諸改革の行なわれた一九二五年まで，ほぼ二〇年間にわたり，日本の政治をはじめ，ひろく社会・文化の各方面に顕著にあらわれた民主主義的傾向をいうのであるが，これを生み出したものは，基本的にいって，広汎な民衆の政治的，市民的自由の獲得と擁護のための諸運動であった。[160]

66年の『大正デモクラシー研究』と比較すれば後半部分が異なる。「広汎な民衆」の説明であった「都市中間層を中核とし，労働者・農民および特権をもたぬ新興の資本家をふくむ」がカットされた。これは，松尾が「私見」と断りながらも強調するように，「大正デモクラシーとは都市だけでなく農村に，そして社会の最底辺たる被差別部落へと根をひろげた，かならずしもインテリとはいえぬ広汎な勤労民衆の自覚に支えられた運動」だとして[161]，都市から農村まで，インテリから被差別部落までを含んで考察されたためだと思われる。

そして，もうひとつの変更点は，「政治的自由獲得をめざす運動」が「政治的，市民的自由の獲得と擁護のための諸運動」となった。60年前半の定義ではあった「市民」が復活したのは，70年代との接続が模索されたと考えられる。この「市民的自由」の内容について，ここでは明確な定義はない。しかし，「その生み出した最良の思想的達成は，日本国憲法の基本精神に直結しており，戦後民主主義の日本社会への定着は大正デモクラシーを前提としてはじめて可能であった」と書いていることから日本国憲法で保障された自由を指すと考えられる[162]。いうまでもなく，このように松尾に書かせたのは石橋湛山や『新報』の研究があったからこそであった。

定義にもまして66年時と異なるのは，「わたくしは手放しで大正デモクラシーを賛美するつもりはない」と書かれた点である。これは大正デモクラシーが帝国主義確立後に形成されたものである以上，「民衆の側も，たとえば大国主義といった帝国主義による不断の思想的汚染を受けねばならない。」からである。それゆえに，当初「内には立憲主義，外には帝国主義」という大正デモクラシーの初期の指導理念が帝国主義と敵対する「社会主義と自由主義の二要素のからみあう運動の展開のなかで，どのように，またどのていどまで克服されていくのか，その実態を考察すること」が目指された[163]。

本書の構成は，第1部「大正デモクラシーの初期段階」（日露戦争講和反対条約，悪税反対運動，急進的自由主義（東洋経済新報）），第2部「民本主義の底辺」（地方的市民政社，『第三帝国』，「冬の時代」の社会主義者），第3部「大正デモクラシーの展開」（部落解放運動，過激社会運動・三悪法反対運動，民本主義者の朝鮮観）である。

まず各部のタイトルを見て気付くことは，第2部の題のみ大正デモクラシーではなく「民本主義」とされたことである。これは松尾において，もはや「民本主義」（吉野作造）＝大正デモクラシーではないことを物語るが，その背景として『新報』の存在が大きい。第3部の第9章でも『新報』の植民地放棄論が取り上げられ，本書というより，松尾の大正デモクラシーの背骨として位置づけられた。この長く高い軸が入ることで，本書及び松尾の大正デモクラシー像の統一感と安定感が増したといえる。

実際，第2部の「地方的市民政社」，『第三帝国』，「冬の時代」の社会主義者が幅広い可能性をもってとりあげることができるようになった。例えば，「日露戦後にあらわれた社会主義思

想を尖端とする自由主義の潮流の産物」である「地方的市民政社」の運動により，「名望家中心の伝統的地方社会を内部からゆさぶりはじめた」こと[164]。1913 年創刊の雑誌『第三帝国』により，『新報』が到達した「内には民主主義，外には非帝国主義」の地点が，第一護憲運動後は民衆から隔絶したものでなくなっていることを示していること，などである[165]。

もちろん，幅広い可能性とは，頂点のみを示すことを意味しない。例えば，地方的市民政社では「その意識にはある限界を持つ」として，その要求が選挙権拡張にとどまり普選にいたらないこと[166]。あるいは，吉野よりも早く「民本主義」を用いた茅原華山がその後「転身」して，世界大戦参戦の合理化や「新東洋主義」などを訴えていくことを明らかにする[167]。

その「民本主義」の深度を松尾が探ったのが「「冬の時代」の社会主義者」だろう。同論は，社会主義，自由主義，民本主義の提携を考察している。日露戦争で「非戦」に立った社会主義者と戦争を支持した自由主義者の提携はたしかに途絶えた。しかし，個人的な関係までは途絶えたわけではないとして，その提携の細い糸を堺利彦に見い出そうとする。堺は「社会主義者としての主体性を失わず，しかも，民本主義の潮流を利用し，政治的自由のための戦線の拡大につとめた」[168]。その具体的な取り組みこそが馬場孤蝶の立候補であり，この立候補に際して率先して推薦状を寄せたのが夏目漱石だった。「この選挙でははからずも，文壇における自由主義者と社会主義者の共同戦線が成立したわけだが，その大看板となったのは漱石であり，この挙を推進したのは堺利彦であった」と松尾は語る[169]。『新報』の評価とあわせて考えならば，文化やメディアにおける急進的な自由主義を積極的に評価しようとする姿勢がここにはある。

思想を越えた提携は，これにとどまらない。その対象に，松尾は堺利彦と吉野作造の交流を設定する。米騒動後，「堺は民本主義の旗手吉野作造その人と提携を策した形跡がある。」[170] これは，吉野らをいただいて結成された黎明会に，「政治的，市民的自由獲得のための幅ひろい統一戦線的組織を構想していた」堺が関わっていたのではないかということである[171]。しかし，「学界・論壇の中での統一戦線を考えていた」吉野との提携は[172]，ついに実現しなかった。その理由に，吉野において「時勢の洞察力」[173] が弱かったことを松尾はあげる。

> 吉野が一歩ふみ出して堺らと提携したならば ―― そのさい堺が表面に出て指導権を握ったとは考えられぬ ―― 黎明会は一九年九月におこった国際労働会議代表選出をめぐる意見の対立のため活動不振におちいり，翌年夏には解体してしまうということにはならないで，のちの政治研究会のような，無産政党の母胎にまで発展しえたのかも知れない。これから日本の民主主義的諸運動が全面的に開花しようとしているとき，民本主義の旗手吉野作造と社会主義運動の首領堺利彦の合作がならなかったことは，大正デモクラシーにとって不幸な事態であった。[174]

鉄の実証を誇る松尾の歴史研究だからこその「ならば」の問題設定であった。[175]

10 「大正デモクラシー」と統一戦線論

さて，ここまで自由主義者，社会主義者，民本主義者とその提携の可能性の幅を見てきた。彼らだけの提携ならば，66 年の『大正デモクラシー』の延長線にいるだけである。ここから松尾はさらに別の一歩を踏み出す。それは，先述の「水脈」論で，陸羯南の「国民主義」に端を発し鳥居素川らの『大阪朝日新聞』論説陣に継承される流れに着目していたことと関わる。『大正デモクラシー』はこの水脈を意識して執筆されていた。「はしがき」であえて長谷川如是閑の文章を配置したのもその一環であった。

第 1 部の「日露戦争講和反対条約」は「一見反動的な国民運動」を扱った章だが，それが大正デモクラシーの出発点となることを描く[176]。ここで松尾は「国権主義者の動向」に注視し，「内に専制を批判しない純粋な対外硬派は，この運動から脱落した」と述べる[177]。

本論では，玄洋社，黒龍会を「純粋な対外硬派」に据えることで，それとは異なる系統の思想が持ち得た可能性を歴史から掬いとろうとする。この系統に連なる思想は「立憲主義」の要求に結びつくが，松尾は先行研究がこうした思想を「立憲主義的帝国主義」と呼ぶのを批判し[178]，「内には立憲主義，外には帝国主義」として両者を緊張関係においてとらえたうえで，後者から前者へと移行していく歴史過程を掴み出そうとする。そしてこの延長線上に位置し，かつ「民本主義」の直接の先行者となっていくのが『新報』であった。

第 3 部第 7 章「部落改善より部落解放へ」でもこの傾向は続く。同章は「被差別部落民の自主的組織化」[179] を扱った箇所であり，いかにして改善から解放に転じたかが論旨となる。部落改善運動を論じる際に帝国公道会の大江卓が取り上げられ，その立場が「民族の独立をおびやかされたときの国権主義から，他民族を支配する立場に移った国権主義へとすでに変容していた」とする[180]。しかし，米騒動は，部落民の連帯感を成長させ，部落の支配体制を動揺させ，改善主義に破綻をもたらした。またなにより「米騒動は部落問題を日本資本主義の生み出した社会的諸矛盾の一環として浮かび上らせた」[181]。

とはいえ，松尾は解放への契機について，米騒動という外在的な要因ではなく，いかにして被差別部落民自身が「改善主義」の意識を乗り越えたかに着目する。「改善」は「部落民と部落外民衆との人格的格差を前提としている」し[182]，彼らにおける「天皇崇拝の意識は容易に消滅するものではなかった」からである[183]。これを「心の修養」[184] によって乗り越える道があり，松尾の論でも紹介された。しかし，松尾はこの傾向に一定の理解を示しつつも，次のように批判した。

彼〔「大阪富田林の僧籍を持つ一学生和雅音」〕の「部落としての解放」ではなく「人間としての解放」であるべきだという主張は，一面においてたしかに改善主義に対する内在的批判でありえたが，部落改善を，人間としての改善に一般化・抽象化することにより，現に生活的に差別されている存在としての部落民の立場から遊離するおそれが多分にあった。[185]

ここに松尾における「統一戦線」論の意味を認めることができるのではないか。たしかに「部落民」と「部落外民衆」を「人間」という共通項で結ぶことで，より広い統一戦線を実現することができる。しかし，それは主体が自立していない漠とした統一でしかない。一見相反する，主体の自立と幅広い統一をいかにして両立させるのか，ここに難しさがあった。松尾は抽象化しえない，そしてしてはならない具体性にとどまるよう述べている。これは部落差別の問題だけに限ったことではないはずである。いわば，「社会の最底辺」[186] から浮かびあがる，統一戦線に向けた「最底辺」を示そうとするものであった。

この次に続く章が，「普通選挙・治安立法と社会主義者」「民本主義者の朝鮮観」である。

まず「普通選挙・治安立法と社会主義者」では，第一次世界大戦後の普通選挙運動，過激社会運動取締法案をめぐる動き，三悪法反対運動などであるが，ここで指摘されるのは普選に対する社会主義者の消極的な姿勢である。当時の社会主義者，労働者は「革命前夜主義ともいうべき政治運動否定，議会政策反対の気分にとりつかれていた」[187]。

とくに松尾の批判は，普選運動否定論を展開した山川均に及ぶ。しかし，山川にはよく知られる「無産階級運動の方向転換」があるはずである。これは，「コミンテルンが，一九二一年六月の第三回大会で，ヨーロッパの情勢が直接革命をめざす段階から革命を準備する段階に移ったという判断のもとに，共産党の勢力強化のためには改良主義者や中間派の指導下にある大衆の中に入って労働者の共同戦線をつくらねばならぬ，との方針を打ち出したことに触発されたもの」であった[188]。言葉を補えば，イタリア・ファシズムの台頭を受けた反ファシズム統一戦線の提起で，1937 年の反ファシズム人民戦線の源流ともいえる。

しかし，山川の論は結局，「心がまえの方向転換」[189] に終わり，現実に生かせなかった。これは山川をイデオローグとする共産党も同じで，「二二年テーゼのうたった政治的，経済的分野における民主主義的スローガン，および当面の具体的戦術として強調された普選運動への参加には討論が及ばなかった」[190]。むしろ，松尾は『労働週報』の共同戦線の取り組みの方を評価した。

「民本主義者の朝鮮観」は本書の最後を飾るものである。ここでは第一部と同じく，帝国主義の腑分けが行われ，玄洋社の流れを汲む中野正剛が，「内には立憲主義，外には帝国主義」[191] のいわば正嫡として設定された。その中野と吉野作造が比較された。吉野は当初は中

野と同じく「内には立憲主義，外には帝国主義」の立場だったが，在日朝鮮人学生との接触，そして国内問題に対する政治的立場の転換（「民本主義」）により，中国や朝鮮のナショナリズムに対する理解を進めていった。

松尾はさらに，中野と同じく形式的にはアジア主義でもその中身がまったく異なる人物として宮崎滔天をあげる。「彼のアジア主義は，日本を盟主とすることを条件としての大アジア主義ではなく，被抑圧民族の自決を前提とするアジアの連帯をうたったものであることは明らかであろう。」[192] 松尾はこの精神が息子の龍介を介して吉野や新人会，さらに石橋湛山に流れていったとする。その石橋らが関わった『新報』については，国民主権論，植民地放棄論を紹介しながら次のように結論づける。

> 「内には立憲主義，外には帝国主義」という日露戦争終結の地点における自由主義陣営の基本理念は，第一次大戦後，『東洋経済新報』の「内には国民主権主義，外には非帝国主義」によりはじめて内面的に克服された。われわれは大正デモクラシーの最高の思想的達成の一つをここに見出すことができる。『新報』の軍備を放棄し，丸腰となって平和な民主主義的産業国家として生きよという構想は，われわれに，日本国憲法が日本の民主主義の歴史と無関係に成立したものではないことを示しているのである。[193]

『新報』を介した大正デモクラシーと戦後民主主義の接合である。もちろん，松尾はこの「最高」の地点だけが歴史から獲得できればよいと考えていたわけではなかった。それを実現していくための方法としての統一戦線が必要であった。

ではこの「急進的自由主義」との提携が望まれる社会主義者はいかなる態度をとったのか。たしかに「社会主義の各派と民本主義左派」「アジア被圧迫諸民族の解放をのぞむ日本人と，在京の朝鮮・中国人」が集まったコスモ倶楽部という思想団体はあった[194]。しかし，社会主義者の朝鮮観には問題が認められた。松尾はその原因を「帝国主義のかもし出す毒素としての大国意識」や「日本革命近しの希望的観測」に見る[195]。松尾の批判のなかで注目すべきは，当時の社会主義運動に見られた「朝鮮無産階級は，日本無産階級と同一組織に属すへしとの主張」[196] に対する以下の叙述である。

> 組織合同論は第一の朝鮮の民族運動の独自の意義の軽視と，第二の日本革命優先の見解の結合から来る組織論としての結論である。朝鮮の解放はプロレタリア革命によらねば実現できず，それは日本革命があって可能だから，朝鮮革命家はすべからく日本の革命組織に合同して，まず日本革命に献身せよ。これでは，朝鮮人民のナショナリズムを無視した形を変えた同化主義だといわれても，仕方ないのではあるまいか。[197]

これは先の部落「改善」と「解放」の狭間に横たわる微妙な問題を想起させる。「心の修養」による部落改善と同じく，組織合同論も「善意」から発せられたものであった。しかし，松尾はそこにこそ問題を認め，双方を内在的に批判する。「改善」と「解放」の断絶を越えうるとすれば，それは朝鮮民族運動の「独自の意義」やナショナリズムを「朝鮮人民」が自ら保持することであり，日本の人々はそれを理解することであった。そのうえでなければ「組織合同」は成り立たないのである。ここでも，提携に向けた「最底辺」が示されている。

このように松尾の『大正デモクラシー』は，大正デモクラシーの思想を社会主義ではなく自由主義の方に見出す。そしてその自由主義と社会主義に国民主義の「水脈」を併置する。これら三者の提携をひとつの理念型とするが，その提携は自らの立場を省み，内なる指導性を相対化することが前提とされた。これが松尾の考える大正デモクラシーのあるべき到達点であった。

お　わ　り　に

本論は，松尾の大正デモクラシー研究を，1974 年の代表作にいたる経緯・背景を振り返りながら，改めてその意義を再考した。

1990 年代以降，総力戦体制論や国民国家論，帝国論など歴史研究の新しい潮流がおこるなかで，大正デモクラシー研究は批判的に言及されることが多くなった。そのなかには有益な批判も見られる一方，大正デモクラシー研究が生まれた歴史的・学問的背景を顧慮しない批判も見られるようになった。筆者も拙著『戦間期日本の社会思想』（人文書院，2010 年）で，松尾の大正デモクラシー研究を大正期の普選運動の再検証を通じて批判したが，同研究の歴史的・学問的背景を十分におさえていたわけではなかった。その時の宿題を果たしたのが本論である。

実証に重きを置く松尾は，自身の歴史研究で理論を引用することは稀であった。しかし，晩年になって，レーニンの言葉を引きながら次のように述べている。

> 私は，マルクス・レーニン主義の影響下にある人間ですが，これまでマルクス曰くとか，エンゲルス曰くとか，レーニン曰くとか引用したことは一度もない。しかし，マルクス主義の影響力がおとろえてしまった今日だから，あえて引用したい。「歴史的功績というものは，歴史上の活動家たちが現代の要求とくらべてあたえなかったところのものによって判断されるものではなくて，彼らがその先行者たちにくらべて，新しいものをあたえたということによって判断されるのである」（「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」大月書店版『レーニン全集』第二巻，一七一ページ）[198]

これは歴史家にとっても同じことがいえるはずである。歴史家が先行者に対してどのような

新しいものを与えようとしたのかによって，その「歴史的功績」は判断されなければならない。

同時に，松尾は，「人の思想は著作だけではわからない。行動にこそ思想が現われるというのが私の立場です。」[199] と述べた。たしかに，さまざまな思想の提携をもとに，彼の大正デモクラシー研究は組み立てられている。しかし，思想はひとつの指標でしかないことを前提に，各主体がいかなる行動をとったかを実証的な裏付けをもって明らかにしていったのが松尾の歴史研究であった。

以上の 2 点は，松尾の大正デモクラシー研究を今日から検証する際に参照されるべき見解である。彼が生きた時代を顧慮せず，彼の「立場」を尊重しないまま，彼の研究を批判することは慎むべきであろう。本論も松尾の著作を歴史学の流れに位置づけるだけでなく，彼の軌跡を可能なかぎり明らかにしつつ，その学問形成を辿ろうとした。現時点では，松尾個人の一次資料は公表されていないが，今後多くのことが明らかになっていくと思われる。本論は，そのための方法的，実証的なたたき台となればと考えている。

最後に，松尾の大正デモクラシー研究について，時代的背景とその意義についてそれぞれ振り返っておこう。

松尾は，1966 年に『大正デモクラシーの研究』を，1974 年に『大正デモクラシー』を公刊した。それゆえ，60 年代半ば以降の日本社会を執筆の背景として考えてしまう。たしかにその傾向はあるものの，松尾の大正デモクラシー研究の源流をさかのぼると，それ以前の時期が重要であることがわかる。

見逃せないのは 1950 年代であり，共産党の 50 年分裂から武装闘争を経て，55 年の六全協時の「統一」へいたる過程との関わりである。この時期は松尾が京大入学から京大人文研の助手に就いて歴史研究者として歩み始める時期と一致する。また，この時期の武装闘争や国民的歴史学運動には歴史研究者も関わっていた。その後，彼らが，六全協での党側の一方的な「統一」により挫折を味わったことを，党の「シンパ」だった松尾も見ていた。ここからの，松尾なりの試行錯誤が，渡部徹の強靱な実証研究の継承や，井上清を中心とするレーニン全集を読む会への参加，丸山眞男の著作への依拠であり，そしてこれらから着想を得た，大正デモクラシー研究の刷新であった。

こうして開始された松尾の大正デモクラシー研究は，社会主義に代表される変革の歴史を再検証しながら，自身が経験した戦争やファシズムを批判していくものになる。戦時期に末端といえども戦争に加担していた松尾の心中は複雑であったと思われる。それゆえに，ファシズムや戦争に抵抗しうる大正デモクラシーのあり方を理念型として求め続けることになった。

その結果，大正デモクラシーとファシズムを連続的にとらえる視点が弱いとの批判を招くことになった。しかし，こうした批判に若干の反論を試みたのが本論である。松尾は，ファシズムであれ，広義のデモクラシーであれ，その内側に着目してきた。ファシズムや帝国主義につ

いては，丸山の研究を参照して，国民主義と分けて考えようとした。夏目漱石や『東洋経済新報』からは，自由主義の急進的な部分を析出しようとした。そのうえで，国民主義や急進的自由主義と，自身が拠って立つ社会主義，民主主義との提携を歴史的に明らかにすることが彼の大正デモクラシーの特徴であった。

もう一つの特徴は，社会主義をふくむ広義のデモクラシーの内側を見ようとしたことである。松尾は「戦後民主主義」に対して一貫して擁護の立場をとった。だが，その一翼をになった共産党に対しては「シンパ」にとどまり，党中心の歴史観には必ずしも染まらなかった。このため，松尾はファシズムや戦争を批判する側の問題点からも目を背けることなく，新たな変革の可能性を歴史に求めることに早くから自覚的だった。どの思想に立っても，自らを客観的に捉えながら，他の思想との提携に向かう余白を自らに確保していくこと，またその余白によって自らの立場をつねに点検すること，その柔軟性の重視である。

このように，松尾の論が優れているのは，大正デモクラシーの光の側面をただ称揚するのではなく，光と影の交錯を直視しようとしたことである。光を領導する人々や思想が，天皇主義や帝国主義に見られる指導性と通底する可能性に松尾は気付いていた。よって，彼は光の側面が多方向から検討される場に着目したのであり，これこそが彼の研究の随所で描かれる，各々の思想や運動が提携する場であった。

1960 年頃の大正デモクラシー研究にはこの部分が強く出ていたが，1974 年になると，自由主義や国民主義に立つ配役を増やして検討された。両著のもっとも大きな違いは，変革に向けた提携において，各主体が内なる指導性に自覚的であったか否かである。これが社会や国家の「底辺」を事例として，各思想・運動の提携における「最底辺」として提示された。松尾にしてみれば，これこそが個人における「自由」へいたる道であった。それはいかなる主義や思想においても担保されるべきものであり，逆にこの「自由」のない思想，運動は，それがいかに「進歩」的であれ，侵略と抑圧へと容易に転化する。ここに松尾が提示した大正デモクラシーの核心があり，今日でも振り返られるべき地点であると考える。

附　記

同論執筆に際して，同志社大学人文科学研究所「転換期のデモクラシー「戦後民主主義」に関する歴史的・理論的研究」研究会の皆さま，同「歴史学の成り立ちをめぐる基礎的研究 —— 現場と公共性 ——」研究会の皆さま，高木博志氏，永井和氏にさまざまな教示を得た。この場を借りて御礼を申し上げたい。

註

1）　大正デモクラシーは「」を付すべきだが，煩瑣のため以降は省略する。戦後民主主義，ファシズムも同様の扱いとした。

2）　松尾尊兊「優しかった信夫先生」信夫清三郎先生追悼文集編集委員会編『歴史家　信夫清三郎』勁草書房，1994 年。

3）　信夫清三郎『大正政治史』1 巻，河出書房，1951 年，1 頁。

4）　信夫清三郎『大正政治史』4 巻，河出書房，1952 年，1374-7 頁。

5）　飛鳥井雅道「大正デモクラシーとわれわれ」『朝日新聞』1975 年 2 月 17 日付朝刊。

6）　松尾尊兊『大正デモクラシー』岩波書店，2001 年，vii。

7）　松尾尊兊「私の見た中野重治」『ちくま』253 号，1992 年 4 月。坂野潤治「「松尾大正デモクラシー論」の今日的意義」『二十世紀研究』16 号，2015 年。

8）　井口和起「大正デモクラシーの実証的研究の先駆者　追悼・松尾尊兊先生」『歴史評論』785 号，2015 年 9 月。

9）　有馬学・伊藤隆「松尾尊兊著「大正デモクラシー」，鹿野政直著「大正デモクラシーの底流」，金原左門著「大正期の政党と国民」，三谷太一郎著「大正デモクラシー論」」『史学雑誌』84 巻 3 号，1975 年 3 月。

10）　松尾尊兊「夏目漱石と電車賃上げ反対運動」『図書』297 号，1974 年 5 月。

11）　宮地正人『日露戦後政治史の研究』東京大学出版会，1973 年，238 頁。

12）　松尾尊兊『大正デモクラシーの研究』青木書店，1966 年，1 頁。

13）　前掲「夏目漱石と電車賃上げ反対運動」。

14）『二十世紀研究』の特集では，前掲「「松尾大正デモクラシー論」の今日的意義」，鶴見太郎「郷土，地方からの視点形成　松尾先生のデモクラシー研究における一側面」が，『日本史研究』の特集では，能川泰治「松尾尊兊『大正デモクラシー』を読み直す　その批判的継承のために」，竹永三男「二一世紀の松尾史学　松尾尊兊氏の大正デモクラシー史論と現代の民主主義」がそれぞれ松尾の学問を論じている。それ以外には成田龍一「松尾尊兊さんのこと」（『自由思想』137 号，2015 年 4 月）や前掲「大正デモクラシーの実証的研究の先駆者　追悼・松尾尊兊先生」，島元健作「（追悼　松尾尊兊先生）お別れのことば」（小林弘季編『青空』2017 年 10 月）などがある。

15）　一般的な「大正デモクラシー」の定義や分析視角の有効性等は有馬学「「大正デモクラシー」論の現在」（『日本歴史』700 号，2006 年 9 月）や千葉功「研究史整理と問題提起　一九六〇～七〇年代を中心として」（『歴史評論』766 号，2014 年 2 月）で言及された。近年は，平野敬和，藤村一郎，田澤晴子による「「大正デモクラシー」の再検討」（『日本思想史学』48 号，2016 年 9 月）や「三谷太一郎氏インタヴュー記録「大正デモクラシー」研究をふり返る」（『社会科学』48 巻 2 号，2018 年 8 月）など，戦後思想史の文脈から大正デモクラシー研究の再検討が行われている。本論は，一般的な大正デモクラシーの再検討を目的としたものではなく，まずは松尾の軌跡と研究の検討を通じて大正デモクラシーの内実を検討することとしたい。松尾が三谷太一郎とともに，大正デモクラシー研究を牽引したことを踏まえれば，本論が一般的な大正デモクラシーの再検討にも資するものはあると考えている。

16）　本論では，松尾の主著が刊行された 1974 年までの大正デモクラシー論を対象としたが，その後，戦後史を対象に研究を進めるなかで，大正デモクラシー論も戦後民主主義の評価と連動して変化していくことは拙稿「大正デモクラシーと戦後民主主義　松尾尊兊の研究を中心に」出原政雄・望月詩史編『「戦後民主主義」の歴史的研究』（法律文化社，2021 年）を参照のこと。

17）　松尾の軌跡，著作物は松尾尊兊教授退職記念事業会『松尾尊兊教授年譜・著作目録』（1993年），「故松尾尊兊名誉教授主要業績一覧」などを参照。松尾家は両親と松尾のほかに4人の姉がおり，松尾によれば家族全員が鳥取一中か鳥取高等女学校の出身だったという。

18）　松尾尊兊「一期一会」『米原章三伝』米原章三伝刊行会，1978年。鶴見太郎「郷土，地方からの視点形成　松尾先生のデモクラシー研究における一側面」『二十世紀研究』16号，2015年。

19）　松尾尊兊「佐々木惣一博士と日本の自由主義」『世界』458号，1984年。

20）　松尾尊兊「戦中工場学徒勤労動員日記」上・下『鳥取地域史研究』9・10号，2007・2008年。読む本も「皇国史観」で知られる平泉澄の『国史の眼目』（帝国在郷軍人会本部，1938年）などで啓発された様子が伺える。松尾の交友関係も同じ傾向で，「車中で神兵隊の盟主の一人大野先生（天野辰夫？）に会う。種々高論をきき，共鳴する所多し」（9月9日），「田中貴路（血盟団事件の田中邦雄の兄）宅にたずねて中住さんに会い話しを聞く」（9月10日）との記述も見られる。

21）　松尾尊兊『本倉』みすず書房，1983年，404頁。

22）　進学先として，松尾は第三高等学校を視野に入れていた節もある（松尾尊兊「試験の季節」『京都新聞』1983年2月17日付）。

23）　松尾尊兊・河西秀哉・秋元せき「日本史研究会の歩みと今後の課題　松尾尊兊氏に聞く」『日本史研究』632号，2015年4月。

24）　松尾尊兊「忘れられぬ言葉」『健康』238号，1983年6月。

25）　前掲「日本史研究会の歩みと今後の課題　松尾尊兊氏に聞く」。松尾は当時のストライキ仲間として吉岡吉典の名をあげる。「ストライキ仲間の一人で，卒業前に占領下非合法化された共産党員として地下に潜り，職業革命家となり，最終的に日本共産党最高幹部委員となり，参議院議員を二期つとめ，引退後二〇〇九年ソウルで客死した吉岡吉典は私の終生の友人の一人であった。彼は上洛するとかならず連絡をくれて，食事しながら日本政治の動向や共産党の内情を説明してくれた。」（松尾尊兊『大正デモクラシー期の政治と社会』みすず書房，2014年，iv）。

26）　前掲『本倉』376頁。

27）　松尾は1949年頃の藤原との関係を「ときには〔藤原〕先生はなぜ共産党に入られないのか（本人は青共，すなわち今日の民青にさえ属していないのに）などとたずねるのだから，まったく申し訳ない次第である。」と語る（松尾尊兊「藤原治先生をしのぶ」『しごならず　歴史の教師藤原治』今井書店，1995年）。

28）　前掲『大正デモクラシーの研究』1頁。

29）　入学試験（2月実施，3月27日合格発表）では，国語，歴史，第一外国語，第二外国語，専攻試問のうち国語と第一外国語（英語と思われる）で優れた成績を残している（「本科入学試験成績表」文学部庶務課『教授会関係書類　昭和二十五年』03B00076，京都大学大学文書館所蔵）。

30）　松尾尊兊「北山茂夫氏の死を悼む」『朝日ジャーナル』26巻7号，1984年2月。松尾尊兊『中野重治訪問記』岩波書店，1999年，20頁。

31）　高木博志・小林丈広「岩井忠熊氏に聞く」『日本史研究』605号，2013年1月。

32）　前掲「日本史研究会の歩みと今後の課題 松尾尊兊氏に聞く」。

33）　前掲「北山茂夫氏の死を悼む」。

34）「退官インタビュー　松尾尊兊」『京都大学新聞』1993年3月16日付。

35）　前掲「日本史研究会の歩みと今後の課題 松尾尊兊氏に聞く」。

36）　まつおたかよし「荒神橋事件抗議デモ印象記」『新しい歴史学のために』19号，1953年12月。

「大学を卒業したら田舎教師になるつもりで，雑多な本を読みちらしたり，デモに加わったりでロクに専門の勉強をしなかった人間」とも書く（松尾尊兊「よく学びよく遊んだ助手時代」『人文』46 号，1999 年 11 月）。

37）　京大天皇事件は以下の研究を参照。今西一「京大天皇事件前後の学生運動」（上・中・下）『燎原』223～5 号，2016 年 3・5・7 月。拙稿「一九五〇年前後における京大学生運動（下）　綜合原爆展と京大天皇事件を中心に」『京都大学大学文書館研究紀要』14 号，2016 年 3 月。

38）「読者からの手紙」（京都市一学生）『世界』76 号，1952 年 4 月。

39）　史学科の他の国史講師では昭和 27 年度には三品彰英，林屋辰三郎，石田一良，柴田実の名前がある（「昭和二十七年度講師表」文学部庶務掛『教授会関係書類　昭和二十八年自一月至十二月』03B00085，京都大学大学文書館所蔵）。

40）　前掲「退官インタビュー　松尾尊兊」。

41）　松尾尊兊「山辺さんをしのぶ」『山辺健太郎・回想と遺文』みすず書房，1980 年 4 月。

42）　田中聡「東大構内にて紙芝居一座の勢揃い」小林丈広編『京都における歴史学の誕生　日本史研究の創造者たち』ミネルヴァ書房，2014 年。

43）「研究部会の動き　近代支部会」（松尾尊兊）『新しい歴史学のために』6 号，1952 年 3 月。

44）「日本史研究会の二十年」『日本史研究』81 号，1965 年 11 月。

45）　松尾尊兊「人文研より文学部へ」『以文』36 号，1991 年 10 月。

46）　偲ぶ会呼びかけ人『追憶　故渡部徹先生』11 頁。

47）　松尾尊兊「私の日本近代史研究回顧」『史林』94 巻 3 号，2011 年 5 月。

48）　前掲『本倉』411 頁。

49）　松尾と堀江ゼミとの関わりは以下の文献を参照。脇田修「堀江英一先生を偲ぶ　一九五〇年代を中心に」『日本史研究』238 号，1982 年 6 月。後藤靖「堀江英一先生の人柄と学問」『経済論叢』129 巻 3 号，1982 年 3 月。

50）　田中真人編『渡部徹先生を偲ぶ　渡部徹先生を偲ぶ会の記録』同志社大学人文科学研究所，1995 年，4 頁。

51）　大学院入学時の研究題目は「日本近代史の研究」，指導教官は小葉田淳，赤松俊秀，織田武雄になっている（文学部教務掛『旧制大学院入学関係綴　昭和二八年度』02B07450，京都大学大学文書館所蔵）。

52）　前掲『追憶　故渡部徹先生』11 頁。

53）　同前，12 頁。

54）　同前。

55）　前掲「人文研より文学部へ」。

56）　松尾尊兊「マツデンセン」『健康』349 号，1990 年 5 月。松田については和田悠「松田道雄における市民主義の成立」北河賢三・黒川みどり編著『戦中・戦後の経験と戦後思想　一九三〇-一九六〇年代』（現代史料出版，2020 年）参照。

57）　松尾の大学院退学につき文学部長原随園から京都大学長服部峻治郎宛に提出された「大学院退学に関すること」の日付は 1953 年 11 月 11 日付で「追つて昭和二十八年十月十五日付にて許可して下さい」という注記がある（文学部教務掛『旧制大学院退学関係綴　昭和二十八年度』02B09524，京都大学大学文書館所蔵）。退学理由は人文研助手となったためである。

58）　富永茂樹「調査報告　加藤秀俊 @zinbun.kyoto-u.ac.jp」『アリーナ』12 号，2011 年 11 月。

59）　井上清「「米騒動研究」班のしごと」（『所報』44 号，1955 年 7 月）には「この仕事はじつは昨

年十月に，日本部主任の了解を得て，日本部の共同研究の中で社会経済構造の研究をうけもつた私たちの班の臨時の仕事としてはじめられた。」とある。同号収録「研究活動」には松尾が6月15日に「米騒動と社会主義者たち」の題で報告したとある。

60） 井上清「「大正期の政治と社会」のテーマについて」『所報』51号，1957年6月。同号収録の「本年度研究課題」には同研究班の学内では山岡亮一，学外協力者として市原亮平，鶴島雪嶺，後藤靖，君村昌，里上龍平，中塚明，江口圭一。

61） 前掲「よく学びよく遊んだ助手時代」。

62） 松尾尊兊「石橋湛山研究」事始め　大正デモクラシーと『東洋経済新報』研究を回顧する」『自由思想』111号，2008年8月。のち『近代日本と石橋湛山』（東洋経済新報社）所収。

63） 松尾尊兊「桑原武夫先生と日本映画を見る会」『創造的市民』29号，1991年10月。

64） 松尾尊兊「五四運動と日本」『世界』518号，1988年8月。

65） 前掲「桑原武夫先生と日本映画を見る会」。

66） 松尾尊兊「日本映画を見る会」『京都新聞』1982年12月21日付。

67） 前掲「私の日本近代史研究回顧」。

68） 前掲「日本史研究会の歩みと今後の課題 松尾尊兊氏に聞く」。前掲「石橋湛山研究」事始め大正デモクラシーと『東洋経済新報』研究を回顧する」。前掲「岩井忠熊氏に聞く」によると，レーニン全集を読む研究会には立命館大から掛谷宰平が参加していたとある。研究会の開始時期については木坂順一郎「江口圭一さんとその学問」（江口圭一追悼文集刊行会『追悼　江口圭一』人文書院，2005年）に1956年からはじまったとある。木坂の回想には，1953年以降，渡部徹らによる『西園寺公と政局』一巻を読む研究会に参加し，そこで市原亮平，松尾，福本茂雄らが出席していたという（木坂順一郎「私と日本近現代史研究」『年報・日本現代史』7号，現代史料出版，2001年）。

69） 前掲「石橋湛山研究」事始め　大正デモクラシーと『東洋経済新報』研究を回顧する」。

70） 松尾尊兊「ひとつの驚異」『静岡県近代史研究会会報』100号，1987年1月。

71）「日本史研究会の二十年」『日本史研究』81号，1965年11月。

72） 前掲「ひとつの驚異」。

73） 前掲「日本史研究会の二十年」。

74） 同前。

75） 前掲『本倉』63頁。

76） 松尾はその後中野との交流記録をまとめた『中野重治訪問記』（岩波書店，1999年）を刊行したが，その中で自身の大正デモクラシー研究を中野が後押ししてくれたことを次のように書いている。「私が一九六六年，はじめての著書『大正デモクラシーの研究』を中野さんに送ったところ，その返事に，私の「はしがき」を引用して「「任意の文章をとり出して，その思想がいかに“民主主義”に近いか遠いかを論ずるのではなく，民本主義者の生き方自体を問題にすること……」ここのところ，いささかぴしゃりと頬にひびく思いです」（一九六六年七月十一日付）と書いて下さった。」（11頁）

77） 松尾尊兊「丸山眞男先生からの手紙」『みすず』45巻11号，2003年。

78） 同前。

79） 同前。

80） 前掲「私の日本近代史研究回顧」。

81） 前掲「丸山眞男先生からの手紙」。

82）　同前。

83）　松尾尊兊「京都地方の米騒動に対する官憲の対策」『日本史研究』25 号，1955 年 9 月。同「京都地方の米騒動」『人文学報』6 号，1956 年 3 月。同「米騒動前後の摂津西浜部落」『部落』76 号，1956 年 5 月。同「研究の手引　米騒動」『部落』86 号，1957 年 3 月。同「米騒動研究のあゆみ」『歴史学研究』209 号，1957 年 7 月。同「被差別部落民と米騒動」下中邦彦編『日本残酷物語』5，平凡社，1960 年 7 月。同「米騒動と軍隊」『人文学報』13 号，1960 年 11 月。久松千代〔松尾の筆名〕「米騒動の四十周年」『アカハタ』1958 年 8 月 9 日付。渡部徹・松尾尊兊「「米騒動の研究」全五巻の刊行を終えて」『書斎の窓』103 号，1962 年 8 月。

84）　まつおたかよし「米騒動（一九一八年）をどうみるか」『新しい歴史学のために』24 号，1954 年 6 月。

85）　松尾尊兊「京都地方の米騒動」『人文学報』6 号，1956 年 3 月。

86）　前掲「丸山眞男先生からの手紙」。

87）　京都大学所蔵の同著には丸山から松尾への献呈署名などが記載されているほか，松尾の手による赤線や書き込みなどがある。

88）　丸山眞男『政治の世界』御茶の水書房，1952 年，81 頁。この箇所には赤線と赤丸が書き込まれている。

89）　同前，56 頁。

90）　同前，56 頁。

91）　同前，56，7 頁。

92）　渡部徹編『京都地方労働運動史（増補版）』京都地方労働運動史編纂会，1959 年，7 頁。

93）　前掲『渡部徹先生を偲ぶ　渡部徹先生を偲ぶ会の記録』6 頁。

94）　松尾尊兊「城南争議ノオト」『日本史研究』27 号，1956 年 7 月。

95）　1956 年 6 月の読史会大会で「友愛会の性格について」の題で研究発表。1957 年 11 月の京都大学人文科学研究所開所記念講演会で「大正前期の社会運動　友愛会を中心として」と題で公開講演。論文としては，松尾尊兊「友愛会の発展過程　第一次世界大戦下における内的転換と成長」『史林』40 巻 6 号，1957 年 11 月。同「大日本労働総同盟友愛会の成立　友愛会史論二」『人文学報』8 号，1958 年 3 月。同「若き日の鈴木文治とその周辺　友愛会前史」『人文学報』15 号，1962 年 1 月。

96）　松尾尊兊「野坂参三「風雪のあゆみ」を読んで」『歴史評論』251 号，1971 年 6 月。

97）　松尾尊兊「友愛会の発展過程　第一次世界大戦下における内的転換と成長」『史林』40 巻 6 号，1957 年 11 月。

98）　同前。

99）　鈴木も羽仁門下である。藤原は井上門下で，1954 年に米騒動の資料を東京から人文研に運びこんでくれたとき以来親しくなったと松尾は振り返る（前掲「私の日本近代史研究回顧」）。

100）　井上清・鈴木正四『日本近代史』上巻，合同出版社，1955 年，3 頁。

101）　同前，3 頁。

102）　同前，262 頁。

103）　前掲『大正デモクラシーの研究』2 頁。前掲「佐々木惣一博士と日本の自由主義」にも同じ場面があるが少し表現が異なる。

104）　同前，2 頁。

105）　松尾は，同時期に「一九五八年の歴史学界回顧と展望　日本史（近代・現代）」（『史学雑誌』

68 巻 5 号，1959 年 5 月）を担当しており，両作業は重なっていた可能性が高い。

106） 松尾尊兊「大正デモクラシー研究の展望」『新しい歴史学のために』51 号，1959 年 4 月。

107） 同前。

108） 前掲『日本近代史』102 頁。また同著において，山川の「無産階級運動の方向転換」を「労農戦線のなかのサンヂカリズムやセクト主義をうちこわすために」（103 頁）と紹介しているのも，六全協後を意識した形容と考えられる。

109） 前掲「大正デモクラシー研究の展望」。

110） 松尾尊兊「大正デモクラシー期の政治過程　普通選挙問題を中心に」『日本史研究』53 号，1961 年 3 月。

111） 同前。

112） 同前。

113） 松尾尊兊「美濃部達吉」井上清編『日本人物史大系』第 7 巻近代 3，朝倉書店，1960 年。

114） 松尾尊兊「家永三郎著「美濃部達吉の思想史的研究」」『歴史学研究』296 号，1965 年 1 月。

115） 松尾とルソーはすぐには結びつかないが，人文研西洋部の人々との交流から着想されたのであろう。

116） 松尾尊兊「五〇年前のルソー誕生記念会」『日本史研究』58 号，1962 年 1 月。

117） 松尾尊兊「明治末期のルソー」『思想』456 号，1962 年 6 月。

118） 松尾尊兊「山宣と私」『山宣』2 号，1996 年 11 月。

119） 松尾尊兊「山本宣治と性教育」『中央公論』80 年 6 号，1965 年 6 月。

120） 松尾尊兊「一九一五年の文学界のある風景と最晩年の漱石」『文学』36 巻 10 号，1968 年 10 月。

121） 前掲「丸山眞男先生からの手紙」。

122） 丸山眞男「陸羯南　人と思想」『中央公論』62 巻 2 号，1947 年 2 月。

123） 前掲「私の日本近代史研究回顧」。

124） 松尾尊兊「政党政治の発展」『岩波講座　日本歴史』第 19（現代第 2），岩波書店，1963 年。

125） 同前。

126） 同前。

127） 日本史研究会の大会テーマを見ると，1961 年は「現代における歴史像の再構成」（近代史は「日本帝国主義と中国革命」）である。1962 年も「ふたたび現代における歴史像の再構成のために」の大会テーマで鈴木良・佐々木隆爾「日本帝国主義の成立と構造」，飛鳥井雅道「日本帝国主義思想の成立」の報告があった。

128） 松尾尊兊「関東大震災下の朝鮮人暴動流言に関する二，三の問題」『朝鮮研究』33 号，1964 年 10 月。松尾は帝国主義研究との関係で朝鮮に言及することが多いが，日本共産党の六全協開催前に武装闘争を担った在日朝鮮人を党が外したことを念頭に置いていたのではないかと想像している。

129） 松尾尊兊「民本主義者と五四運動」桑原武夫編『ブルジョワ革命の比較研究』筑摩書房，1964 年。

130） 同前。

131） 前掲『大正デモクラシーの研究』1 頁。

132） 同前，1 頁。

133） 同前，131 頁。

134） 同前，296 頁。

135）　同前，170 頁。

136）　書評会は開催され，『日本史研究』87 号（1966 年 11 月）にその時の様子が掲載。ただし，「「大正デモクラシー」論には消極的・批判的だった」という（前掲「大正デモクラシーの実証的研究の先駆者　追悼・松尾尊兊先生」）。66 年に開催された「日本史研究会の二十年」に林屋辰三郎，藤谷俊雄とともに出席したので，関係が悪化していたわけではない。

137）　前掲「私の日本近代史研究回顧」。

138）　以下明記しない限り「Democracy in the Taisho Period」（『The Developing Economies』4 号，1966 年 12 月）より引用。

139）　前掲「丸山眞男先生からの手紙」。

140）　松尾尊兊「訪日日記抄」『みすず』24 巻 8 号，1982 年 8 月。松尾尊兊「訪中雑感」『交流簡報』22 号，1982 年 10 月。

141）　松尾尊兊「初めてのアメリカ」『日本歴史』716 号，2008 年 1 月。

142）　同前。

143）　英米遊学中の松尾は「my intellectual grandfather is Hani Gorou」を自称していた（前掲『大正デモクラシー期の政治と社会』 iv 頁）。

144）『シンポジウム　日本の歴史　二〇　大正デモクラシー』学生社，1969 年，260，1 頁。

145）　前掲「人文研より文学部へ」。

146）　同前。

147）　前掲「よく学びよく遊んだ助手時代」。

148）　松尾尊兊「「石橋湛山研究」事始め　大正デモクラシーと『東洋経済新報』研究を回顧する」『自由思想』111 号，2008 年 8 月。この経緯や班の構成などは渡部徹「『石橋湛山全集』と共同研究「大正デモクラシーと東洋経済新報」」（『石橋湛山全集月報』6，1971 年 4 月）参照。

149）　脇村義太郎・松尾尊兊・高柳弘・大原万平・石橋湛一「東洋経済と石橋湛山〈座談会〉」『自由思想』33 号，1984 年 9 月。

150）　前掲「「石橋湛山研究」事始め　大正デモクラシーと『東洋経済新報』研究を回顧する」。

151）　同前。

152）　松尾尊兊「急進的自由主義の成立過程」井上清・渡部徹編『大正期の急進的自由主義　『東洋経済新報』を中心として』東洋経済新報社，1972 年。

153）　松尾尊兊「日露戦争後における非軍国主義の潮流の一波頭」高橋幸八郎編『日本近代化の研究』下（大正・昭和編），東京大学出版会，1972 年。

154）　松尾尊兊「大正デモクラシーと石橋湛山先生」『世界』336 号，1973 年 11 月。

155）　松尾尊兊「大正デモクラシーの一水脈　石橋湛山とその先行者たち」赤松俊秀教授退官記念事業会編『赤松俊秀教授退官記念国史論集』赤松俊秀教授退官記念事業会，1972 年。

156）　松尾尊兊「忘れられた革命家　高尾平兵衛」『思想』577 号，1972 年 7 月。

157）　同前。

158）「えつらん室」『朝日新聞』1973 年 11 月 12 日付朝刊。

159）　松尾尊兊「一九二三年の三悪法反対運動」渡部徹，飛鳥井雅道編『日本社会主義運動史論』三一書房，1973 年。

160）　松尾尊兊『大正デモクラシー』岩波書店，1974 年，ｖ頁。

161）　同前，vi 頁。

162）　同前，vi 頁。

163） 同前，vi，vii頁。
164） 同前，116，7 頁。
165） 同前，142，3 頁。
166） 同前，117 頁。
167） 同前，141 頁。
168） 同前，157 頁。
169） 同前，159 頁。
170） 同前，166 頁。
171） 同前，170 頁。
172） 同前，170 頁。
173） 同前，171 頁。
174） 同前，171 頁。
175） この部分は想定で終わっているが，永井和「デモクラシーの本質，追求　松尾尊兊さんを悼む」（『朝日新聞』2014 年 12 月 23 日付朝刊）によると，「吉野作造をテーマに執筆中の岩波新書の完成をみることなく」と書かれており，吉野と堺の提携が改めて検証されていた可能性がある。
176） 同前，vii頁。
177） 同前，28 頁。
178） 前掲「急進的自由主義の成立過程」。
179） 前掲『大正デモクラシー』1974 年，viii頁。
180） 同前，187 頁。
181） 同前，187 頁。
182） 同前，200 頁。
183） 同前，212 頁
184） 同前，200 頁。
185） 同前，201 頁。
186） 同前，173 頁。
187） 同前，239 頁。
188） 同前，244，5 頁。
189） 同前，245 頁。
190） 同前，270 頁。
191） 同前，280 頁。
192） 同前，294，5 頁。
193） 同前，309 頁。
194） 同前，311 頁。
195） 同前，317 頁。
196） 同前，315 頁。
197） 同前，315 頁。
198） 松尾尊兊「吉野作造と東アジア」吉野先生を記念する会編『吉野作造の人間・思想を語る』吉野先生を記念する会，1998 年。この部分は松尾自身の読書体験に依拠すると思われるが，中野重治からの教示によっても裏付けられたと思われる（松尾尊兊『中野重治訪問記』岩波書店，1999 年，8，9 頁）。
199） 前掲「私の日本近代史研究回顧」。

要　旨

本論の目的は，戦後日本の歴史学を牽引し，大正デモクラシー研究で知られる松尾尊兊（1929–2014）の軌跡と学問形成を実証的に明らかにしながら，分析概念「大正デモクラシー」の内実を再検討することである。時期は，松尾が生まれた1920年代末から主著『大正デモクラシー』を刊行する1970年代までである。

本論の構成は全10章からなる。1，2章は生誕から京都大学人文科学研究所助手に就任するまでの軌跡を松尾の回想や資料から描いた。3，4章は，松尾を取り巻く政治的状況や，研究環境から，彼の歴史研究者としての歩みを明らかにした。5章で，松尾の大正デモクラシー研究の学問的，社会的背景を説明したうえで，彼の研究の特徴である，自由主義・社会主義・国民主義連携の強調（6章）や，近代化論批判を通じた大正デモクラシー研究の位置づけ（7章），「急進的自由主義」の提示による大正デモクラシー研究の発展（8章），以上の集大成となる『大正デモクラシー』刊行（9章）とその学問的な意義（10章）についてそれぞれ検討した。

本論の意義は次の3点に集約できる。① 2014年に亡くなった松尾の業績についてはまだ検討が始まったばかりだが，本論は松尾を戦後史及び戦後歴史学に具体的に位置づけ，後者の意義を明らかにしたこと。② 近年批判の対象となる松尾の大正デモクラシー研究について同時代の歴史学との連関や政治的背景を踏まえることで再考をうながし，松尾が提起した大正デモクラシーの内容と意義を再確認したこと。③ 松尾の大正デモクラシー研究は，戦争やファシズムを批判するだけでなく，それらを批判する変革・抵抗運動における問題を検証することで，各思想・運動が提携する場に着目し，各主体が内なる指導性を相対化しつつ，個人の「自由」を実現する道筋を描こうとしたことを明らかにしたことである。

キーワード：松尾尊兊，大正デモクラシー，戦後歴史学，丸山眞男，戦後民主主義

Summary

This article explores the trajectory and academic formation of Matsuo Takayoshi, a leading historian of post-war Japanese history and known for his work on Taisho Democracy, from his birth in the late 1920s to the 1970s, when he published his main book, “Taisho Democracy”, and then analyzes the concept of “Taisho Democracy”.

This article is composed of ten chapters: chapters 1 and 2 describe the academic environment in which Matsuo began his career as a historian, from his birth to his appointment as a research assistant at Institute for Research in Humanities, Kyoto University ; chapters 3 and 4 describe the academic environment in which he began his career as a historian ; and from chapter 5 onward, the academic and social context in which he began his study of Taisho Democracy. Matsuo then describes the linkage between liberalism, socialism, and Kokuminshugi (nationalism) that characterized his research the position of Taisho Democracy studies through his critique of Modernization Theory, the development of Taisho Democracy studies through the presentation of “Radical Liberalism”, and the publication of “Taisho Democracy”, which is the culmination of his research. The academic significance was clarified for each of them.

The significance of this article can be summarized in the following three points: 1) This article focuses on Matsuo’s role in postwar history and Postwar Historiography. 2) This article calls for a reconsideration of Matsuo’s study of Taisho Democracy by looking at the political background and its relation to the historiography of the same era. 3) Matsuo’s study of Taisho democracy did not only criticize war and fascism, but also examined the problems in the resistance and reformation movements that criticized them, revealing that the Taisho Democracy research found a place in history where ideas and movements were allied (where subjects could relativize their inner leadership) and tried to establish individual “freedom” from that place.

Keywords: Matsuo Takayoshi, Taisho democracy, postwar historiography, Maruyama Masao, postwar democracy